
ボーダー

小花和うさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーダー

【Nコード】

N7601G

【作者名】

小花和うさ

【あらすじ】

そいつは突然私の目の前に現れたまるで異次元に迷い込んだかのような私だったがその少年には見覚えがあった。少年は私の中から剣を取り出すと現れた怪物に立ち向かっていった。

第一話そいつは突然私の目の前に現れた

そいつは突然私の目の前に現れた。

人は突然目の前で理解不能なことが起こると思考が停止してしまうらしい。

「え？」

私はハッとして辺りを見渡した。

歩道橋から下を見下ろす限り全て停止して見える。

車も人も空気さえ止まっているようだ。

いや、あの止まっているのは人だろうか？

私はそんなに視力が悪い方ではないのだがなぜだか全てがぼやけて形がはつきりしない。

私は戸惑い私の前に現れたそいつを見た。

黒髪で年のころは私と同じくらい、いや上かもしれない。

黒のカットソーの上に皮で出来たちよつと昔のゲームに出てきそう

な簡単なデザインの皮の胸当てをしていて黒のストレッチの利いている革のパンツにこついエンジニアブーツをつつか言わせながら私に近付いてくる。

パツと見はイケメンかもしれないがまがましいものを感じる。

とりあえず私のタイプではない事は確かだ。

うさこなんかは「ああいう冷たそうなところがいいのヨ」なんて言っ
て喜んで飛びつきそうな感じだ。

いや、今はうさこなんてここに居ない人のことを言ってもしょう
が無い。

とりあえず私はパニックに陥っていた。

私は先ほど友人のうさここと別れ家に向かっている途中だった。

歩道橋のエスカレーターに乗った途端途中で止まってしまったので
仕方がなく上まで自力で登ってきた。

そう、その時からすでにいつもと何かが違う気がしていた。

たまに静まり返った裏通りなどで自分以外の人が誰も居ないんじゃないかと不安になってしまうときのような、そんな感じ。

そして歩道橋の上まで来たところで今日の前に居る男が現れたのだ。

そいつはカツカツと私向かって歩いてきて、そして赤い眼を光らせながら私に向かって手を伸ばしてきた。

——痴漢だ!!

そう思った私は走り出していた。

しかし私はあつという間にその男に捕まってしまう。

叫ぼうにも声が出ないのだ。

「お前を探していた」

男は私にそう言った。

こうして冒頭の「え？」に戻る。

この変態は一体何を言っているのだろうか？

私は理解が出来なかった。

見覚えも無いこんな変なコスプレまがいの格好をした変態が、ごくごく平凡な女子高生である私に一体何のようがあると云うのだろうか？

辺りの時間はとまっているように見えるし私にはどうも『今』が現

実のものと思えなかった。

もしかしたら私は気がつかないうちに家に帰っていてこれは夢なのではないだろうか？

そうに違いない。

そう言えばたまに妙にリアルな夢を見ることがあるがあんな感じだ。

自分じゃこれが夢だと認識できている時の夢、それに違いない。

私は一人納得しとりあえず流れに任せてみることにした。

男は私が観念した事が分かると腕を解いた。

握られていた手首が熱い。

私は手首を自分で握り暫く見ていた。

すると変態男が一步下がり私に手を伸ばしてきた。

私は少し身構える。

なぜならその手はどう見ても私の思春期の夢が詰まったたわわな胸に向かつてきているからだ。

「ちょ・・・」

やっと声が出た。

いくら夢とはいえこんな変態に胸をもまれるなんてごめんこうむる。

「ち、来たか」

「へ？」

私の胸に伸ばされた手は一端引つ込むと今度は体ごと私に突進してきた。

「ひいい」

私が声をかけると変態男は私を抱えて走り出した。

そして行き成り歩道橋の手すりに手を乗せたかと思うとそのまま飛び降りた。

「アーーーーーーッ」

——お母さんさようなら~~~~~

次の衝撃に備えギュツと体を強張らせたが軽い振動があっただけで
その後は私は変態男にお姫様抱っこされていた。

待つて待つて、どうして私が変態男の胸に抱かれて居るわけ？

これはいつか現れる私の王子様の役目だよね？

断じてこの変態男じゃないよね！？

なんちゅう夢だ、早く覚めろ！！

男は息を切らすことなく走り続けた。

一体何から逃げているんだろう。

私は仰け反って後ろを見た。

「バカ！見るんじゃない」

「え？」

もう遅かった。

私はそれを見てしまった。

「いやあああああああああ」

私は生まれて初めて自分の耳が破裂するかと思つくりの叫び声を上げていた。

何に例えればいいんだろうか？

私の少ないボキャブラリーではそれを何かに例える事は出来ない。

強いて言うならば「化け物」その一言に尽きる。

酷く醜く、まるで恐怖の塊で出来ているようだった。

私はいつの間にか家の前に立っていた。

どうやら歩きながら夢を見ていたらしい。

どんな夢を見ていたのかはつきりと覚えては居なかったが酷く疲れた。

誰も居ない玄関のドアを開け「ただいま」と言いながらソファ―に寝転んだ。

「はぁ・・・何もして無いのに疲れた・・・」

時計を見ると7時を回っていた。

うさこと分かれたのが確か5時半、一体私は一人でその間何をして
いたのだろう。

「怖い・・・バカだ私歩きながら寝るなんて、どこでも寝れるから
って・・・」

独り言を呟いていると誰も居ないと思っていたのに二階から足音が
聞こえてきた。

私はハッとして体を起こす。

「お帰り姉さん」

「なんだ衆太か・・・」

私は再びソファに顔を埋める。

「え？」

衆太なんて弟私に居ただろうか？

私はもう一度顔を上げる。

「どうしたの？心音姉さん……」

笑った衆太は夢で見た誰かにそっくりだった。

微妙なズレが生じ始めた

学校から家までは徒歩15分。

自転車ならその半分で済む。

一番近いと言う理由で私はここを受けたのだが、私の通う一学高校は県内でも1・2を争う難問校で当時の私の偏差値では届くはずもなかったが何とかギリギリのラインで合格したのである。

我が校が誇る国際コース、体育コース、特進コース、進学コースとある中で一番地味で目立たない普通コースだけれどそれでもやはり私にとっては難関で受験はかなり賭けに出た部分もある。

中学の先生なんかはもう最後の方は哀れなものを見るような目で私を見ていたのを思い出す。

友達のうさこは憧れの先輩を追って来たそうだけど、その先輩が卒業してしまってからまた次のターゲットを見つけてキヤーキヤー言っていた。

結局誰かにキヤーキヤー言いただけのミーハーである。

それに引き換え私は全然男子に興味が持てない。

いや、今まで恋くらいはしたことはあるけれど夢中になれる人なんて居ない。

だから素直に誰かを好きになれるうさこが羨ましい。

「シオンは理想が高いんだヨ、王子様みたいな人いるわけ無いじゃん」

うさこは肩まである二つに結んだ髪の毛を左右に揺らしながら、やれやれといった感じで肩をすくめて見せた。

ちなみに私の名前は心の音と書いてここねと読む。

うさこがシオンと私を呼ぶのはそう間違われる事が多いからである。

私が親だったら絶対子供には変な名前付けない！ふっふっふの名前にする。

もう少しで心愛^{ここあ}になるところだったらしい・・・可愛いかもしれないが間違いなく名前負け決定である。

それに飲み物の方を連想してしまっただけ暑苦しい感じがする。

私くらいならまだまだ、小学生の頃騎士と書いてナイトという子が居て勿論襟足は長かった。

親のセンスを疑ってしまう。

付ける方は良かれと思ってつけてるのだろうが付けられた本人としてはたまったものではない。

事あることにいちいち訂正しなくてはならないのだ。

例えばクラスで最初に先生に名前を呼ばれる時も顔を赤らめながら変わった名前を言わなければならない苦痛は本人にしかわからない。名前に関してはそれくらいにしておこう、ただ名前が少しコンプレックスだという事を知っておいて頂きたい。

「そう言えばさ」

うさこが思い出したかのように手を叩いた。

私は机に頬杖をついたままうさこを見上げた。

「昨日家に帰ってから今日の時間割聞こうと思って電話したのにシオン居なかったね？」

「え・・・何時くらい？」

「えーっと7時過ぎかな？」

「・・・その時間なら家に居たよ？」

「うそーおばちゃんが出たけどまだ帰ってないって言うから心配したんだよ!？」

「うそ・・・だって昨日は7時くらいに家に着いて・・・そした

ら誰も居なくて……」

私は頭を捻る。

私は確実にその時間には家に居たはずだし母も仕事で遅くなると聞
いていたから確実に居なかった。

「ちょーやめてヨ~~~~」

うさこはブルブルと震えて腕をクロスさせた。

「おかしいなあ……よそにかけたんじゃないの？てかなんで携
帯にかけてくれなかったのよ」

「だって圏外だったから……」

「圏外？何でだろ……いつもそんなこと無いのに……」

「えーなんか怖い、この話もう止めとこ!？」

うさこが怖がるもんだから私もなんだかとても怖くなった。

怖いというから不気味だ。

このズレは一体何なんだろう、そんな事私が知る由もなかった。

夢が現実かわからない

その日は放課後ちょっと寄り道をしてからうさここと別れ、いつも通る歩道橋に向かって歩き出したが、なぜか足が止まってしまった。

—— イッテハイケナイ

私の中の何かがそう忠告しているような気がして私はその日いつもより大回りをして家に帰った。

玄関のドアノブを回すとカギが開いていた。

「ただいま」

中に入ると母が出迎えてくれた。

「遅かったのね」

「そう？」

「また寄り道したの？昨日だって遅かったじゃないうさこちゃんから電話あったって言うてるのに上の空で・・・」

「はあ？知らないよそなの！教えてくれなかったじゃん」

母はぽかんと口をあけて私を見ている。

どうしてだお互いの話は矛盾している。

私は昨日家に帰ってどうしていたっけ？

思い出せない。

誰か先に帰っていたような気がするのに母と私以外今はこの家に誰も居ないはずだ。

兄は就職して家を出ているし父は海外赴任中だ。

なのにどうして私は誰かいたような気がしたんだろう。

ブルツと身震いする。

「何か疲れてるみたい・・・寝るわ・・・後で起こして」

「大丈夫なの??」

「うん、ちょっと疲れてるだけだから」

私は制服のリボンを取りそのまま部屋のベッドに倒れこんだ。

思い出せない。

昨日私に何が起きたんだろう、何かが少しずれている。

家に帰ってから誰かと確実に会話をした覚えがある、それが誰だったのか思い出せないし昨日母と顔を合わせた覚えは無い。

母の話によると私は遅く帰ってきて母が声をかけるのもまるで聞こえてないようだったらしくソファーに身を投げると何か独り言を呟きながらそのまま寝てしまったらしい。

「うーん相当疲れてるな・・・何をしたってわけでもないのになあ・・・」

私は考えるのも面倒になり制服のまま眠ってしまった。

眠りに落ちる瞬間「ああ、制服グチャグチャになるなあ」なんて考えていた。

何時間か経った頃ギシギシと二階に人が上がってくる音が聞こえた。

ぼんやりとした意識の中で母が起こしに着てくれたんだと思った。

トントントとノックする音がして私は小さく唸った。

寝起きは良い方ではない。

「姉さん・・・起きて」

「んゝもう少し・・・」

ゴロンと寝返りを打ち声に背を向ける。

「だめだよ・・・起きてくれないと」

「んゝご飯何？」

「・・・だよ」

「え？」

振り返るとそこに居たのは衆太だった。

「姉さん、時間だよ」

「わかつたって・・・」

私は眠いたい眼を擦った。

目の前に立っている弟の衆太は・・・えーっと何年生だっけ？

思い出せない。

「今行くから……」

集太にそう言っていると弟はにやっと笑った。

「……………」

「先に行つていいよ？」

「ねえ本当に弟なんて居た？」

「は？」

「僕は本当に姉さんの弟かな？」

「何言つてんの？大丈夫？」

私は衆太の額に手を当てた。

「僕は大丈夫だけど姉さんは大丈夫じゃなさそうだね」

「大丈夫、もう目が覚めたから」

「いや、まだ姉さんは夢の中だよ」

「え？」

私はよく辺りを見渡してみた。

確かに電気についてない部屋は薄暗く夢と言われればそんな気もしなくはない。

「夢なの？」

そう尋ねると衆太はにやつと笑った。

この顔にどこかで見覚えがある、あれは誰だっただろう・・・いつどこで・・・

頭の中にスーツと失われていた破片が飛び込んでくるようなそんな衝撃が私を襲う。

「うつ」

思わず頭を抱え前のめりになる。

なんだろう今は？

私は衆太を見上げた。

衆太の口元はうつすらと笑みをたたえている。

「あんたは……………」

頭の中に歩道橋が浮かび上がる。

思い出した。

変態だ。

衆太はあの変態男に似ている。

10年後の衆太はあんな感じになるかもしれない。

「何で？私は衆太なんて知らないのに何で???」

どうして今までこいつが弟だと思っていたのだろう？

「あんた誰なの？」

「衆だよ……」

「分げわかんない……なんなのよ」

頭の中がゴチャゴチャする。

「姉さんの力が僕には必要なんだよね……」

⌈
•
•
•
•
•
⌋

衆太は私に向かって手を伸ばしてきた。

デジャブ？

変態男と一緒にだ。

私は慌てて部屋から逃げ出した。

「お母さんおかーさん!!!!!!」

リビングに居るはずの母を呼ぶが母の気配は無い。

裸足のまま私は外へ駆け出していた。

昨日のように周りの空気が止まっている感じだ。

——なんなのよ——

変態男!!？

「逃げられないよ姉さん……」

「あ！」

私の目の前には衆太が待ち構えていた。

そして彼は見る見るその形を変えていった。

そう、昨日見た変態男そっくりに成長していった。

行き成り目の前で少年から大人に変わった衆太に私は啞然とする。

とりあえずわかることはこいつは変態でありそして人間ではないという事。

「あんだ……」

私が口を開いた途端また例のあれが姿を現した。

今度は直ぐそこ逃げる間もなかった。

「ち！行くぞ！！！」

「え！？」

変態男の手が私の胸に触れたかと思うとグイと中に入ってきた。

え？中に？？？

「いやっ……あっ……ああっ！！！！！」

「変な声出すな！」

「あっん……だ、だってな、何これえええ」

変態男の腕は私の胸を貫き体の内部に入っていた。

内部と言っても臓器部分ではなく兎に角自分の中心に触れられているような感覚だ。

変態男は罰が悪そうな顔をしてグイツと手を動かした。

「らめえそんな動かさないで！！！」

「お、お前なあ！！！！！！！」

心なしか変態男は頬を赤らめているような気がする。

しかしそんなことはどうでもいい早く私の中から出て行け！！！！

そう願った瞬間ズンッと私の中に衝撃が走る。

ふわっとして体の力が抜ける。

——なにこれ・・・あれ????

「暫く借りるぞ」

——え？

変態男の手には光る剣が握られていた。

——ああ・・・綺麗・・・

薄れていく感覚の中で私は変態男のその姿が魔物と戦う王子様に見えた。

中学生時代の同級生の愛と再会した私

次の日気がつくとは私はベッドの中に居てグチャグチャになった制服を着ていた。

「しまったあのまま寝ちゃったんだ!？」

私は起こしてくれなかった母に文句を言う為に下に下りた。

「もーお母さんなんで昨日起こしてくれなかったの!？」

「何言ってるの!! 散々起こしたのに心音ったらどっかいったじゃない」

「え？」

「急いで出て行くものだから何か緊急な事があったのかしらと思つて心配したらその後フラフラになつて帰ってきて訳を聞いても何も言わずにそのまま寝ちゃうし・・・あんた学校で何かあったの？」

母の顔が曇る。

「まさかイジメ！？昨日のは呼び出し！？」

「いや・・・うちの学校そんなバカなことする人居ないから・・・」

「じゃあ何！？」

「いや、悪夢見ちゃって気が動転してたんだろうね・・・アハハ」

「ええ？もしかしてうつ病とかじゃないの！？」

「いや、うつではないと思うけど・・・」

「一回病院に行ったほうがいいかもしれないね昨日もおかしかったし・・・」

母は完全に私のどこかに異常があるのだと勘違いしてしまったらしい。

「おはよう姉さん」

振り返ると衆太が居た。

「ああ・・・おはよう」

「・・・昨日は大変だったね」

「え？」

「また忘れたんだね」

「何？」

「良いけど・・・またその時が来たら僕は遠慮なく姉さんの力を借りるから」

弟まで支離滅裂な事を言っている。

やはり私は本気でヤバイのだろうか？

「大丈夫、最初は誰でもそうなる。でも僕と合いだしたらズレもなくなる」

「?????」

「いつてらっしやい」

衆太がぱちんと指を鳴らすと私はいつの間にか学校に着いていた。

このところ記憶がやけに飛ぶ。

私はいつの間に学校に着いたんだろう・・・母と話していて・・・

その後どうしたんだっけ？何も思い出せない。

誰かに何か忠告されたような気がするのに何も出てこない。

「あ~~~~」

私はグシャグシャと頭をかいた。

「おっすシオン！おはヨ」

ツインテールを揺らしながらうさこがポンツと私の肩を叩く。

甘いにおいがした。

「あんたまた何か食べながら歩いてきたでしょ？」

「え？わかった！？だって駅から歩くの結構遠くてさ、今日朝ごはん間に合わなかったからシュークリーム食べながら歩いてきたの」

「朝からよくそんなもん食べれるわね」

「何言ってるのブドウ糖は脳に良いんだから！シオンも甘いもの食べて頭を働かせなさい！」

そう言っつてうさこは鞆からもう一つジャンボと書かれたシュークリームシュークリームの袋を取り出してよこした。

ジャンボと言うだけあり軽く小柄なうさこの顔くらいの大きさがあった。

こいつは歩きながら10分程度でこれを丸ごとぺろり行ったのだろうか？

化け物！！

と私は心の中で呟いた。

が、しかしそんな事を思っているとは微塵も顔に出さずに

「あ、ありがと・・・」と言って受け取った。

とても今食べられるような気分ではなかったので昼休みにでも頂こうと思ひ鞆にしまった。

「どっかにいい男いないかしら」

昼休みの窓際の席で壁にもたれながらうさこは苺牛乳のストローを口に咥えたままそんな事を呟いた。

校庭では男子が元気よく遊んでいる。

「またイケメンウオッチング？」

私はおべとうを突付きながらうさこを白い目で見た。

「だって潤いの無い高校生活のどこに楽しみがあるっていうのヨ！イケメンは心の癒しなの、オアシスなの！わかる？」

「はぁ・・・」

うさこの力説にドン引きしつつ私もチラッと外に目をやる。

確かにずば抜けて格好の良い男子と言うものは女子に比べ少ないよ
うな気がする。

女子のように外見を磨こうとしないからだろうか？

鏡の前で外見ばかり気にしている男子なんてそれはそれでナルシストみたいでキモイが。

「あ、あの子可愛い」

私が顎で指すとうさこは物凄い速さで身を乗り出した。

そこまで飢えているのか？

「えっえっ！？どこどこ！？」

「ほら、あそこに座ってる子」

「え？」

うさこはゆっくりとこちらに顔を向けると不審な目で私を見た。

「可愛いって・・・あれ女じゃん・・・」

「え？可愛いくない？あのロングの子」

「いや・・・かわいいけど・・・私女に興味ないし・・・」

うさこが妙に低い声で言うものだから私は思わず口の中のものをぶちまけそうになった。

「まさかシオンがそっちの気があるとはねえ……私には惚れないでよ!？」

「任せて私が男になってもあんただけには惚れない」

「あーでも私はどっちかと言えば隣にいるボブの子がいいな」

「えー絶対ロングの子が可愛いよ」

他の人が聞いたら何を言ってるのかと思われそうだが女子から見ても魅力的な女子と言うものは多いと思う。

特に私なんかは普段はクールを装っているが、フリフリしたものと可愛いものに目が無いので可愛い女の子が居るとつい食い入るように見てしまう。

「あゝあの足いいねえ」

「完璧おっさんね!」

うさこはよくそう言うけれど、いいものはいいのだ。

バカな会話を続けているうちに昼休みが終わり私は鞆に入れたうさこのシュークリームを思い出した。

結局食べ損なってしまったが家で食べればいいやとそのまま次の授業の準備をした。

9

「心音ちゃん？」

学校の帰りいつもの歩道橋で真の名を呼ばれ私は振り返る。

私を本名で呼ぶのは小学生までの友達だ。

中学生に入ってからにはシオンと呼ばれる事が多かった。

「わー久しぶりだね！」

眼鏡をかけたいかにも勉強が出来そうな彼女は小学生の時の同級生だった愛ちゃんだ。

小学生の時から頭がよく私がよく居残りをさせられて半べそになっ

ているときなどは一緒に残って勉強を覚えてくれたものだ。

愛ちゃんだったら一学を受けるような気がしていたのだが、彼女は有名な私立学園の制服に身を包んでいた。

「愛ちゃん卒業以来だね！！愛ちゃん中学は私立に行っちゃったから別々だったし……」

久しぶりに小学校の同級生と顔を合わせたので興奮していささかテンションが上がる私とは違い愛ちゃんは至って平常だった。

いや、少し啞然としている。

理由は直ぐに分かった。

私が自分に似つかわしくない制服を身にまとっているせいだろう。

「心音ちゃん……一学に入ったんだ、凄いね……」

「いやー一番家から近くて……私の偏差値じゃ行ける学校遠くて！だから中三になって猛勉強したの、元々カラッポの頭だったから詰め込みやすかったみたい！でも普通科に補欠合格だったんだけどねうちの学校の進学科は流石に無理だもん」

「……そうか、でも凄いよそんな短期間で偏差値上げちゃうなんて……」

「私一夜漬け型だからダラダラやるより集中的にやったほうが頭に入るんだ」

「そうなんだ・・・私なんか試験前は何週間も前から勉強して・・・そんなだから部活も入れなくて・・・塾と学校だけが私の場所みたいなものだよ・・・」

愛ちゃんの表情が曇り始めたので私は話題を変えるべく色々話をしたが愛ちゃんの表情は曇ったままだった。

能天気な私に呆れ果てたのだろうか？愛ちゃんはため息をつくとしそくに微笑んだ。

「愛ちゃん？」

「本当・・・あなたみたいな人が羨ましい・・・」

「え？はは・・・」

愛ちゃんは腕時計を見ると塾があるからと言って私に手を振った。

「あ、うんじゃあね・・・また・・・」

私は暫く愛ちゃんの背中を見送ったが彼女の背中はとても小さく寂

しそつに見えた。

夕日の差す教室で二人で居残りをした日々がとても遠く感じられた。

11

私は歩きながら自分の足元を見ていた。

自分の影がどこまでも着いてくる。

愛ちゃんの背中には重いものを背負っているようで、とても辛そうだった。

私とは違い愛ちゃんは頭も良くその分周囲の期待が大きいだろう、そのプレッシャーが彼女の方には重く押し掛かっているのだろうか？

学校と塾だけの生活とは一体どんなものなのだろう。

私はこれと言って部活には入っていないけれど、それは放課後を友達と過ごしたり家に早く帰ってドラマの再放送を見たりしたい為。

小学生の頃はスポーツも出来て活発だった彼女は本当は運動もしたいはずだ。

でも彼女は文武両道を貫けるほど器用じゃないんだ。

きつと私が思っていたよりずっと彼女は努力をしていたんだろうと

思うとなんだか私まで寂しい気持ちになった。

だから愛ちゃんは私みたいな人間を羨ましいと言ったんだろう。

周りからの重圧もなく、適当に生きてそれで満足している人間が愛ちゃんには器用に見えてそして疎ましく感じられたんだろう。

羨ましいなんて言葉は愛ちゃんの精一杯の皮肉だったのかもしれない。

——はぁ……私って本当に駄目だな

「そんなことないよ」

「!!!!」

自分の心の声が漏れたのかと思った。

私が顔を上げると目の前に少年が立っていた。

また頭の中に記憶がインストールされる。

「衆太……」

彼の名を呼ぶと衆太はにっこりと可愛い笑顔を浮かべた。

「姉さん、また借りに来たよ」

「な、なに！？またセクハラする気！？」

私は自分の胸を庇うように鞆を抱きかかえた。

「違うよ、姉さんの中の力を借りるんだ」

衆太は全てを話し出した

衆太は大人の姿の時より子供の姿のときのほうが落ち着いて見える。

元が大人の方なのだろうか。

「ねえ、私なんであんたの名前知ってるの？聞いたことも無いのに・
・それになぜかあんたを弟だと思ってた。でもあんたと別れた後
はそのことを忘れてるの・・・なんなの！？」

「姉さん」

ずいっと衆太は私に一步步み寄った。

顔が近くに来て私はドキツとした。

「姉さん・・・貰うよ」

「えっああっ！！！」

衆太の手が私の中にズイズイと入ってくる。

またおかしいな感覚に見舞われる。

「んっいやっ・・・んんっ」

「フツ・・・そんな声出しちゃ嫌だよ姉さん・・・」

衆太がどこのホストだよと言いたくなるくらいの甘い声で囁くものだから気がおかしくなりそうになる。

衆太の手が中に入り私の中のものを取り出そうとゆっくりそれを撫で回した。

「だ、だめっそこは！いあっ」

私の体はビクンっと跳ね上がりその勢いに任せて衆太が一気にそれを引き抜いた。

「ああっ」

私は引き抜かれた瞬間脱力感に見舞われその場に倒れ掛かったが足を踏みしめた。

顔を上げると衆太は変態男の姿に変身しており、私から奪った剣ですでに怪物と戦っていた。

この間は気を失ってしまったが今度こそ忘れないように私は意識を保とうと必死だった。

衆太は一匹の怪物と戦っている。

私は昔やったゲームを思い出していた。

3Dアクションのそのゲームは技を繰り出すと光ったり、手の平から魔法が飛び出したりとリアルで子供ながらとても感動したものだ。

今目の前で起こっている戦いはそれに似ている。

よりリアルで、緊迫している。

こんなゲームが出たらさぞ売れるだろう。

私はこの非常時にそんなおかしな事を考えていたが、人間は意外とピンチに立たされると現実逃避というシステムが発動し今起きていることがまるで他人事のように思えてくるものだ。

いや、それは私だけかもしれないがきつと皆にもこんな不可思議な体験をしてもらえればわかるはずだ。

唯一の救いは衆太がお決まりの技の名前などを叫んだりしない事だ。

戦闘中に敵と優雅におしゃべりしたりと言う事も無かった。

私が割りと冷静でいられたのは実は衆太が絶対に負けないという核心があつたからだ。

なぜだか分からないけれど彼が負けるはずはないと私は知っていた。

最後の一刀を振り上げ叩き切ると怪物は消えてしまった。

私はほつと胸を撫で下ろした。

衆太は剣を振り下ろし私を見た。

私はなんて声をかけていいのかわからなかったのでとりあえずお疲れ様と言ってみた。

「フツ、のんきな奴だな」

—— 黙れ小僧

エンジニアブーツの重そうな音を立てながら衆太が近付いてきた。

「ねえさっきの答え教えてよ、どうして私はあんたのこと知ってるの？そして忘れちゃうの？」

衆太は暫くじつと私の事を見ていた。

黒だと思っていた瞳は深い青色をしていてまるでその中に地球があるように澄んで見えた。

引き込まれる。

そう思って私はとっさに目を逸らした。

「あの怪物がなんだかわかるか？」

「いや、わかんないへドロみたいなの……」

「あれは汚れた」

「え？」

突拍子も無い答えに私は顔を上げた。

衆太は遠くを見つめながら話を続けた。

「平たく言えば人間どもが垂れ流している汚物だ」

「え……それって……うん……」

言い切る前に衆太にさえぎられた。

「パンドラの箱を開けたが為に人間はこの星に災いを生むようになった」

「何それ昔話？」

「お前・・・パンドラの箱も知らないのか？」

衆太は信じられない、こいつ頭大丈夫かと声に出さなくてもわかるようなリアクションをとった。

「知ってるわよ！何か神様が開けちゃいけないって言った災いが詰まった箱でしょ？浦島太郎だって開けるなって言われて玉手箱開けちゃったもんね、人間って駄目って言われるとやりたくなるんだよね・・・」

私は自分で頷きながら、疑問にたどり着いた。

「てかそもそも神様も乙姫もそんな災いの詰まったものを何で送るかな？嫌がらせ？」

「お前・・・」

衆太は呆れたように頭に手を当て首を振った。

完全にこいつは駄目だと思われる。

「乙姫とやらがどうだったかは知らんが神は最初から開けさせるつもりで渡しているからな……」

「へー」

私が気の無い返事をしたせいかな衆太は少し機嫌が悪くなった。

「パンドラが箱を開け疫病、悲嘆、欠乏、犯罪が飛び出した、しかし最後に何が残ったと思う？」

「え？」

衆太の目はまっすぐに私に向けれた。

「希望だ」

「希望……」

体中に電撃が走ったような衝撃が私を貫いた。

なぜだかわからないけれど私はその言葉に感動して涙が出ていた。

皆が泣くからって言って借りた本やドラマを見ても泣かない私が泣いた。

どうしてだろう。

14

「神話とは少し異なるが、人間こそがパンドラの箱だ、そして人間の中にまだ残っている希望、それがお前の中にあるこの剣だ」

衆太の手に握られた私の剣。

それが希望の形。

災いを切り取る力。

「私……超凄くない!？」

「自分で言っな」

「いや、でも待って!人間に希望があるなら他の人でも良くない!？」

衆太はくすつと笑った。

小馬鹿もされたようで腹が立つ。

「確かにお前じゃなくてもいい」

「あ・・・そうなんだ」

『お前じゃなきゃ駄目なんだぁー』 的な台詞を期待していた私はがつくりと肩を落とした。

「ただ・・・」

衆太は言いかけて辞めた。

「何よ、気になる！！言つて」

「本来なら一時でも希望を抜かれているわけだから大体の人間は直ぐ気を失うか、泣き叫んで狂ってしまうだがお前にはそれが無い」

「・・・なんで？」

「俺にもわからない、最初こそ気絶したが・・・慣れるにしても

「お前は適応が早すぎる」

「うーんやっぱ優秀なんだ」

「そうかもな……」

衆太はマジマジと私の剣を見た。

「人間がパンドラの箱の中身って話はまあ大体分かったけど、あの怪物は？」

「この星の穢れ……負のエネルギーが次第に集まり固まるとあれが生まれる。俺達は『Ω』オメガと呼んでいる」

「俺たち？……他にも居るの？あんなみたいなの……」

「居るさ……お前が気がついていないだけだ」

「え？」

私は周りの気配に気がついた。

衆太が現れるとき全てが止まって見えるのだが、かすかに周りに何かの気配を感じる。

私のように剣を奪われている人が他にも居るのだ。

「何か・・・凄い・・・ね・・・」

「そうだな・・・」

「なんで衆太はこんなことしてるの？」

「わからない・・・」

「え？」

「お前はなんで生きてるんだ？」

「え？」

衆太は微笑んで

「この世にはわかっていても答えられない事があるんだ」

そう言った。

私は衆太の質問に答えられなかった。

なんで生きているか？

そんなのわかんない。

生きてるから生きてるんだもの。

答えなんて無い。

衆太はそう言うことを言いたかったのかな？

「じゃあなんで私はあんたの名前を知ってたんでしょうか？」

「それを知ってたから知ってたんだ」

「んゝよくわかんないなゝゝ」

私は頭を抱える。

持っていた鞆から甘いにおいがした。

うさこに貰ったシュークリームだ。

もしかして潰れてしまったのだろうか、最悪だ。

そんなことを考えてると衆太が近付いてきた。

グイッと腰を持ち上げられ顔が息のかかる範囲まで近づけられた。

衆太からはコロンのようないい匂いがした。

——こいつ男の癖にそんな洒落たもんつけてんのか……

「後一つ、教えてやる」

「え？」

「お前が俺を忘れる理由」

「何？」

「必要ないからだ」

「えっ」

目を見開くと私のくちびるは衆太のくちびるで塞がれていた。

私は思わず生唾を飲んだ。

生まれてこのかた異性とキスなんてものした事もなかった。

手を繋いだのだって小学生の遠足のときくらいものだ。

頭の中で何かがグルグルと回る。

ああ・・・また記憶が頭の中から抜け落ちていく・・・

「おやすみ、心音」

15

遠くで誰かの声を聞いたような気がして私は我に返った。

気がつく家の前だった。

愛ちゃんと会ってからの記憶が無い。

またブーツとしてたんだ、気をつけなくては・・・

自室のドアを開け私はいつもの調子でポイッと鞆を机の上に投げた。
するとドスツと鈍い音がした。

「しまった!!!」

何か重いものを入れていたかもしれないと慌てて私は鞆に駆け寄り
中身を見た。

「うわぁ……………」

中からむつとするような甘い匂いが立ち上った。

「最悪……シュークリームが……………」

私は眉をひそめ潰れたシュークリームの袋を拾い上げ、目の前に持ってきた。

甘ったるいカスタードと生クリームの混じった匂い。

しかしどこかこの匂いは記憶の奥の何かを引き出そうと刺激する。

もう少しで、何かのキツカケがあればそれは直ぐにでも思い出せそうなのだがなかなか思い出せない。

名前が出てきそうで出てこないときのようなそんなもどかしい感じがして私は首を捻る。

何かシュークリームで以前いやな思いをしただろうか？

よく分からないまま私はうさこには悪いがそれをビニールの袋に入れ捨てた。

「ねえねえシオン！昨日のうたよろ見た！？」

うさこが嬉しそうに昨日の歌番組の話を持ち出した。

何でも彼女の好きなアイドルが出ていたらしい。

「うさこ・・・前は違う人がスキって言ってなかった？」

「ああ、あれ？あれはもうだめよ古い！」

「ああそう・・・」

熱しやすく冷めやすい女である。

でも何かにこうして熱中できるのは大変羨ましい。

私といえは花の女子高生だというのに浮いた話もなく、共学だとい
うのに好きな人すら出来ない。

「ねえうさこ、どうしたら好きな人って出来るの？」

「え？」

私の唐突な質問にうさこは面食らったようだ。

キョトンとしている。

「私、アイドルとか芸能人にも全然興味が沸かないんだよね・・・

」

「・・・シオンは変わってるよ、黙ってれば美人なのに」

「黙ってれば余計でしょ・・・」

美人といわれて悪い気はしない、思わず顔が綻ぶ。

「でもさ男でも女でも顔のいい人ってアッチ系の人多いよね、あの俳優もさ」

うさこの芸能人の噂話を聞き流しながら私は教室の時計を見て早くお昼にならないかなと思った。

愛ちゃんが死んだ？

世界は人と人が交わって構築されている。

私達は世界と言う塔の柱の一つである。

一つ欠けただけではビクともしないだろう。

でも周りの柱たちは軋みだす。

やがて周りの柱たちも倒れれば塔はたちまち軋みだす。

だから私達は欠けるとは許されない。

誰かが誰かの役に立っている、その事を忘れがちだ、つい一人で生きていくような気がしてしまう。

私には特に反抗期と言うものがなかった。

小さい頃から冷めていたし、物事を少し見下して見たいような気がする。

昔は家庭の事情が複雑だったせいもあり、小さいくせに色々と大人の世界の事を知りすぎていたせいかもしれない。

母が再婚するまでは本当に最低だった。

父は絵に描いたようなギャンブラーで外ズラだけは良く、母が夜稼

いだ金を持ち出しては全て散財し、私はなぜ母がこんなくでもない男の言う事を聞いているのか分からなかった。

兄が父に反発すると父は凄い形相でまだ年幅の行かない兄を蹴り上げて殴った。

それこそボロボロで傍には母が居たのに母はただ戸惑った表情を浮かべるだけで兄を庇おうとはしなかった。

だから私は母に聞いたのだ、「どうしてお父さんの言う事を聞くの？」と、すると母は恨めしそうに私を見て、私の肩に手を置くと「あんた達が居るからよ」と、何とも言えない表情で言った。

私は毎夜父が早く死んで皆が幸せになれますようにと祈っていた。

今となっては助けが欲しかったんだと思う。

あの最悪な状況から救い出してくれる誰かを期待して待っていたのだ。

でも本当は自分を一番に責めていた、私さえ居なければ母は辛い思いをしなくて済むのにと。

その後父の浮気が原因で離婚成立し母が再婚してからはまともな生活が出来るようになった。

今の父は真面目だし母も明るくなった。

私も自分の部屋があつて裕福な家庭の子として不自由する事は何も無い。

何も無いはずなのにどうしてだか心は虚無感で溢れていた。

私くらいの年のころはきつと皆こうなのだろうと一人で納得してみたところでそれが埋まるはずもない。

だからうさこのように何かに熱中できる人が羨ましい。

「私にも何か熱中できる事があればなあ……」

制服のまま私はベッドに寝転がった。

ベッドの上には天蓋が付いていてレースがぶら下がっている。

私の趣味だ。

クールに見られがちだが女の子らしいものが大好きで、うさこのように小さくて女の子らしい子が実際羨ましい。

うさこは私にないものをたくさん持っている。

その反面うさこは私を羨ましがる。

結局無いものねだりなのだ。

許されるなら思いつきり女の子らしいフリフリの服を着て外を歩きたい。

しかしそんな恥ずかしい事できるわけが無い。

部屋でゴロゴロして私の一日は終わっていく。

明日になればまた一日の繰り返し。

同じような毎日に何の不安も疑問も抱かず実に平和に生きている。

変革が欲しいとは思っては見ても自分から動くつもりは一切無い。

結局今の生活に満足しているのだ。

もっと貪欲に生きられたら人生もっと楽しいのかな？

まだ分からない。

だって私はまだ高校生だ。

でももう高校生だ。

これからの進路をどう生きるか決めなくてはいけない。

でも先の長い人生を今どう生きるか決めろなんて無理な話。

そう言えば私は昔から将来の話をするのが苦手だった。

小学生の時もなりたいたいものについて作文を書けと言われ、放課後になっても書けなかった覚えがある。

なりたいたいものなんてなかったし、結婚なんていいものじゃないと知っていた。

私はあの頃からすでに人生に失望していた。

今は失望だなんて大それた事は思っていないが、それでもやはり将来を見通す力は無い。

だから高校を決める時だってギリギリだった。

18

「え？なりたいたいもの？」

うさこが一本丸ごと羊羹を頬張り、水筒のお茶をコップにすすぐ。

私の質問にはお茶を飲んでから答えるらしい。

口の中の羊羹をお茶で流し込み一息ついてうさこは人差し指を顎に

乗せた。

「ん〜なりたいものねえ」

「進路とか考えてる？」

「いや〜全然、だって私の頭じゃ入れる学校限られてるし」

「進学するんだ？」

「どうかな〜短大か専門学校辺りかな」

「へー」

「私本当は美大に行きたいんだけどお金掛かるしさ、結構倍率高いみたいだし・・・そこまで才能あるわけじゃないもん」

「え？美大？」

「うん、絵とか好きだし」

「へー・・・」

意外だった。

うさこでも漠然と進路について考えてないわけではないのだ。

自分はどこかでうさこを見下してみていたんだと気付かされる。

私が思ってるよりもうさこは考えてそして自分をしっかり持ってる。

「今から頑張れば入れるかもよ?」

「ん〜ん、結局そんなところ入っても才能がなきゃ無駄だし、お金がかかった分親に申し訳ないじゃん?うち貧乏だから」

「でもさやりたいことあるなら勿体無くない?」

「どうしてもやりたかったら独学でも何でもできると思っただよね、まあ強がりかもしれないけど・・・」

「そうか、でもうさこは絵上手いし才能あると思っよ?」

「はは、ありがと。でも良いんだ手に職が付くような学校に行くよ!そうなるとやっぱ専門学校かな」

うさこに感心しつつ私はやはり見通しの無い自分の将来に少し焦った。

小学校のクラスメイトから突然電話があった。

何事かと母から電話を受け取ると電話口の声は震えていた。

「美村が死んだ」

「え？」

美村と言う言葉に私は最初聞き覚えがなかったので頭をかしげる。

そして次の瞬間頭を強く打たれたような衝撃が走る。

「愛ちゃん……………」

先日歩道橋の上で会ったあの愛ちゃんだ。

あのときちゃんと会話をした愛ちゃんが死んだというのだ。

私は頭が真っ白になり次の人へ連絡網を回すべくメモを取ったが手は震えているし自分は今ここに居ないようなそんな感覚だった。

葬儀には同級生も多く来ていて、中学・高校の同級生らしき人も居たが私はまったく知らない顔ばかりだった。

小学校以来の愛ちゃんがどんな生活を送っていたかはわからない。見知らぬ同級生達に私の知らない愛ちゃんの一面を見た気がした。

同級生との再会を喜べるはずもなく、しめやかに葬儀は滞りなく進んでいる。

愛ちゃんのお母さんが胸に抱きかかえていた愛ちゃんの写真は小学生のままだった。

今まで係わり合いがあったものが突然なんの前振りもなく終わってしまう寂しさをどう表現すればいいんだろう。

裏切られたような、置いていかれたような何とも言えない感覚に酷く心が痛む。

なぜ愛ちゃんは死んだのだろうか？

きちんとした家庭に育ち、勉強も出来て何が不満だったんだろうか？

いや、違う私には分かっていた。

愛ちゃんは疲れてしまったのだ。

突然立ち止まって我に返ってしまったのだ。

——私は何をしているんだろう……もういいや……もう終わろう

だからと言って死んで良いわけが無い。

良いわけが無いんだよ。

だって少しの間離れていて、その存在すらお互いの中で薄れていたのに再開した途端に思いでは込み上げてきて、お互いをまた近くに感じる。

ほんの少し言葉を交わしただけなのに、愛ちゃんを失った心がこんなに苦しい。

20

愛ちゃんの棺が真つ黒な車に積まれるのを私は黙ってじっと見ていた。

棺の中の愛ちゃんを私は最後まで目にすることはなかった。

怖くて見る事ができなかった。

周りの女の子達は肩を寄せ合って泣いている。

葬式なんていう儀式がとてもちっぽけに思えた。

どうしてこんな風に死んだ人と分かれなければならないんだろう。

死んでしまえばそれはただの死体に過ぎない。

なのに死んだ人の思い出をわざわざ引き出して皆で泣く、死人がこんなことで喜ぶわけが無い。

違う。

葬儀は残された者の為にあるんだ。

死んだ人への思いを断ち切れるように。

お別れの儀式。

なら私は愛ちゃんへの思いを断ち切らなければならない。

無理だ。

こんなことは意味が無い。

私の葬式の時はまだ役所で焼いてもらっただけでいい、死んでから何百万もかけてもらわなくて良い。

死ねばただのガラクタでしかない。

「姉さんは随分酷い事言っただね」

私は衆太の声にハッとする。

周りはいつものように時間が停止していて私以外の人間は見当たらない。

振り返るとそこには学生服を着た衆太が居た。

「ガラクタだなんて、そんな風に割り切れるわけ無いじゃないか」

「……」

「人間は厄介な生き物だね、死んだ人間に振り回されてさ」

「そうね」

「そして自殺した人間に『どうして気が付いてやれなかったんだろう』なんて思ったりしてさ、今頃気が付いても遅いんだよね」

「自殺するってことはやっぱり気が付いて欲しかったんだよね……最後のメッセージなんだよね……」

「遅すぎるメッセージだよ。そして親は一生悔む、自分が追いやつたんだってね。周りの友人達は……どうだろうね忘れていくんじゃないかな」

「……私が死んだら誰か覚えていてくれるかな……」

衆太は大人びた笑顔を私に向けた。

「大丈夫姉さんの事は僕がずっと覚えてる」

私はその言葉に凄く安心できた。

でも・・・

「嘘つき」

私がそう言つと衆太はただ何も言わず微笑んだ。

その笑みはおよそ彼の年齢には相応しくなく見えた。

2
1

「あんた、本当は誰？」

私の問いに衆太は目を見開く。

「俺はあんたの一部でもある、そしてこの星の一部さ」

「???」

彼なりの哲学なのだろうか？

私には良く分からない。

地球の一部って言うのは何となくわかるが私の一部とは？

「……何？私の人格の一部とかそんな事？」

「はは、そんなじゃないけど……そだな、強いて言うなら……」

衆太はあつという間に私との間を詰めて私の顔を悪戯っぽく覗きこむようにして見た。

「今姉さんが見てる世界は姉さんだけのものだ。姉さんから見える世界は全て自分のものだ。だとしたら俺だって姉さんのものだろう？」

「そうかもしれないけど……人まで自分のものだって思うのはどうよ……」

「俺から見れば姉さんは俺のものでもある」

「恥ずかしいこと言わないでくれる……」

「まあ簡単に言えばそう言うこと、だから自分の所有物である人間が死ねば悲しいし苦しいんだ」

「何となくわかった……けど私……愛ちゃんのこときつと忘れていくよね」

「忘れるだろうな、たまに思い出した所で思い出話にしかないだろうな」

「人間って……悲しい生き物ね」

「何を今更……言っただじゃないか僕らはパンドラの箱自身なんだから」

「……」

そうだった私は忘れていた。

「また怪物が来る？」

「その辺に居るけど僕たちには気が付いてない」

「衆太以外にどんな人がこの仕事やってるの？」

「……さあ？実際に顔を合わせる事はそう無いからね。お互いに距離を保ってる」

「そう．．．私また忘れてた」

「え？」

「この時間の事．．．忘れちゃうの」

「前にも言っただけど．．．必要ないから忘れるんだと思うよ」

「必要ない．．．のかな？」

「人間は自分に都合の悪い記憶は消して書き換えていく生き物だろ？それに僕だって．．．」

「え？」

私が訳を聞こうと衆太の腕を掴むと、衆太は子悪魔のような仕草で私を舐めるように見た。

こいつは本当は幾つなんだ。

22

「姉さんだつて自分で気が付いていないだけでしている事結構あるんじゃないかな？人を傷つけたり、喜ばせたり」

「それとこれとは話が違う気がするけど」

「似たようなもんさ……」

「ねえ衆太はどうして愛ちゃんが死んだと思う？」

「……さあね、他人の事なんて興味ないし考えた所で分かるはずもない」

「人を理解するなんて自己満足でしかないのかな……」

「真に理解する事は出来ない。だって僕らは他人同士だから。でもね」

衆太は私の手を取った。

「人の痛みなんてわからないけど……ぬくもりだけは感じられる」

「……」

衆太の手の暖かさになぜだか泣けてきた。

「愛ちゃんの手は……もう暖かくないんだよね」

「そうだね……死んじゃったからね」

「死ぬのって怖い？」

「僕は怖いよ？でも人それぞれじゃないの？生きる事の方が怖い人間だって居る。だから死を選んだんだ・・・楽になれると思って」

「どうして怖いって思うのかな？」

「・・・さあね・・・姉さんはどうしてだと思っ？」

「私は・・・」

直ぐに答えが出るような問題じゃない事はわかっていたけど、答えはすんなりと出てきた。

「世界との繋がりが絶たれるのが怖い・・・私はまだ人と関わってたい」

「そう・・・」

衆太はまた大人びた笑みを浮かべると空を仰いでズボンのポケットに手をつっ込み、呟くように言った。

「僕は経験の無いことだから怖いよ・・・」

「・・・」

「どんだけ痛いのか、どんだけ苦しいかわからない・・・もしかしたら僕が思ってるほど悪くないのかもしれない・・・それでも僕は怖いと思う」

「そうだね・・・」

私は愛ちゃんに思いを馳せる、一体どういう風に死はあなたを包んでいったのか。

そして勝手に死んでいった愛ちゃんを心のどこかで憎んだ。

次の瞬間周りの空気が変わるのを感じた。

この嫌な感じは・・・

衆太が嬉しそうに笑った。

23

「来た！」

現れた怪物はこれまでより大きく感じた。

そして以前よりもより形がはつきりしている。

それはグルグルと形を変え人の大きさくらいに変形すると私のみ覚えるのある顔が付いた。

「……………愛ちゃん……………」

いびつで人の形をやつと留めているようなそれは確かに愛ちゃんだった。

「心音ちゃん……………」

「愛ちゃ……………」

私が一歩踏み出そうとすると衆太に呼び止められた。

「だめだ！近寄るんじゃない」

衆太は変態バージョンになっていて私の前に立ちはだかった。

「さて……………はじめようぜ」

「待って、あれは愛ちゃんでしょ！？」

「さあな」

「さあなつて……………」

「俺はあれを倒すのが仕事だからな」

「でも」

「そしてお前は俺の凶器となれ」

「あつ」

衆太の腕がいつものように私の胸の奥に入り込んで来る。

「んあつ……………」

恥ずかしい声を唇をかみ締めて出ないように堪える。

「耐える顔も可愛いぜ」

「バカ！……！」

するつと私の中から剣を引き抜く衆太。

そして愛ちゃんに似た怪物へとたじろぎもせず向かっていく姿は勇

ましい。

私なら足がすくんでどうしようも出来ないだろう。

衆太は一体どれくらい前からこんなことをしているんだろう？

そんなことを考えているうちに衆太の一刀が怪物を切り裂いた。

「あ．．．．」

その瞬間私の中の何かが軽くなるのを感じた。

——心が軽くなった？

さっきまで締め付けられていた心のわだかまりが無くなったようだ。

私は衆太を見た。

カツカツと足音を響かせながらこちらへ向かってくる。

「愛の剣を見せてやろうか？」

「え？」

いつの間にか衆太の手にはいつか美術館で見たような古びた小刀のようなものが握られていた。

それはとても小さく私のものとは比べ物にならなかった。

24

「これ……」

私はそれを手に取った。

小学生の時の思い出が頭を駆け巡る。

優しくて勉強もスポーツも出来る愛ちゃんは私の憧れだった。

そんな愛ちゃんの刀はきつと光り輝いて立派なものだったはずなのに、実際はこんなに弱弱しく殺傷能力も低い。

おまけに錆びて刃毀れを起こしている。

なんて酷い刀だろう。

「それが愛自身だよ」

「え……」

「あいつはその刀のようにボロボロで、もうどうしようもなかったんだ」

「・・・・・・・・愛ちゃん」

私はその刃物を抱きかかえながら泣いた。

それは愛ちゃん自身を抱きしめているようだった。

「さて、もうじき晴れる」

「え？」

「時間だ」

「・・・・・・・・私忘れない」

「無駄だ、このことは忘れる」

「そうじゃない・・・・・・・・愛ちゃんの事・・・・・・・・忘れない」

「フッ、無駄な事を・・・・・・・・」

無駄でいい。

自己満足でいい。

私は愛ちゃんを忘れない。

でもきつと忘れてしまっ、だから忘れない努力をするよ愛ちゃんは確かに私の見ている世界の中に居たんだから。

愛ちゃんを乗せた霊柩車を見送った後暫くの間私は衆太の事を忘れないように考えていた。

でもまた直ぐに忘れてしまっていた。

しゅーた？

嬉しい気持ちや楽しい気持ちは持続しないのに、どうして悲しみはこんなにも尾を引くんだろう。

同級生が死んだ。

その事が私の心に重石を乗せているようで上手く笑えない。

うさこは何も言わないけれどいつもより無理してバカな事を言ったりして私に気を使っているのがわかった。

でもどんなに気を使われても、楽しい事を考えようとしても愛ちゃんのことや、死についての事が頭から離れない。

お弁当もあまり食べる気にならず箸でおかずをひたすら突付いてポーンとしていた。

ふと正面に居るうさこを見るとうさこは毎牛乳を片手にアイドル雑誌を静に読んでいた。

そんなうさこに質問を投げかける。

「ねえうさこ・・・人は死んだらどうなるんだと思う？」

うさこは最初目を大きく見開くと目線を誌面に戻し、それを閉じると頬杖を付いて窓の外を見た。

「さあ・・・経験した人は教えてくれないしね、全部予測でしかないヨね」

「ふーん」

「なに？」

「天国とか信じてるのかと思ってた」

「天国う？アハハ！そんなのあるわけ無いじゃん！どこにあんのヨ？雲の上？オゾン層しかないっつの！」

うさこは手をひらひらさせながら笑った。

私も苦笑する。

ごめんうさこ、私は天国ってあるかもって思ってる。

そうしたら愛ちゃんも今度こそ天国で好きなことが出来るはずだ。

でも自殺した人間はやはり天国へはいけないんだろうか？

世界は常に表裏一体だ、表があれば裏が有る。

天国があるなら地獄はあるはずだ。

地獄のような日々を愛ちゃんが送っていてそこから逃れる為に命を絶ったのだとして、また地獄へ逆戻りだなんて酷すぎる。

「天国も地獄もこの世にあるんだとおもっヨ？」

うさこの一言に私は後頭部を強く殴られたような衝撃を受けた。

「うさこがそんな悟ったようなこと言っなんて……………」

私がいまだに驚いているのでうさこは不審そうに私の顔を伺った。

「なんで？そんなに意外？」

「うん……私はそう言う風に思ったことなかったから……………」

「だってよく試験の時とか皆『地獄だあ』とか言うし、外からクラーの効いた部屋に入ったら『天国だ』とか言うでしょ？ちょっととした事がこの世では天国でもあり地獄でもあるんだヨ」

「……………」

「そう考えると人ってやっぱり常日頃から天国とか地獄を体感してるわけヨ」

うさこの力説に私は納得せざるを得なかった。

私は何の考えもなしに毎日を生きてる。

生とか死とかはつきり言って愛ちゃんが亡くなるまでは気にもかけてなかった。

でもこうして身近で事が起こると考えずには居れない。

「何か・・・生きてるってどういうことかわかんなくなる」

「そんなの哲学者かなんかにやらせとけばいいじゃん、私達みたいな平民は平々凡々暮らしとけばいいのヨ」

「それはそれで夢がなくなる？」

うさこは髪の毛を人差し指でくると巻き始めた。

「でもさ夢ばかり見て足元が見えてない人って、冷静に見てる人からすると『あゝ無理だからやめとけば良いのに』って思わない？」

「・・・うさこって見た目によらずドライなんだね」

「何を今更・・・私からすればシオンの方がちよつと意外かな」

「え？」

「シオンの方が私より冷めた目で色々見てると思ってたから」

「そう・・・かな？」

「人は見た目によらないってことかなアハハ」

うさこは屈託の無い笑みを浮かべて苺牛乳を一気に吸い上げた。

ズズツと音がしてストローから口を離すとプハッと息を吐き満足げな表情を浮かべる。

「夢なんて余裕がある人が見るものなんだと思うヨ」

うさこみたいなメルヘンチックな女の子がそんな風に考えていたなんて、それはとても私にショックを与えた。

私はいつの間にか自分の中での勝手なうさこ像を作り上げていたのだ。

アイドルばかりを追いかけて夢見がちそうに見えて、実際はそんな自分を冷めてみているようなそんな気がした。

26

昨日夢を見た。

最近良く夢を見ているような気がするけど大抵は覚えてない。

実際寝てる間に人は何本も夢を見ているらしいが、覚えているのはほんの少しだけらしい。

昨日見た夢は知らない男性が化け物と戦っている夢だった。

顔は良く覚えていないけれど精悍な顔つきをしていたような気がする。

私はどうやらその人物と知り合いらしく夢の中では私もその人を知っていたのだが何て言葉を交わしたのかは思い出せない。

ただ夢の中に出てきた光り輝く美しい剣のことだけははっきりと覚えていた。

私は昨日見た夢の話をつさこにしてみた。

うさこは男性の事が気になったようで、しつこく外見について訪ねてきたが鮮明には覚えていなかったのでうさこが好きそうな感じとだけ告げておいた。

「まじで！？いいなー私の夢にもイケメン出てこないかなー最近夢見悪くてさースツゴイ嫌な感じに目が覚めるんだヨ」

「へーどんな夢？」

「いやゝなんかよくわかんないんだけど英語の授業受けててノートにひたすら黒板に書かれた文章を書き取るんだけど訳が全然わからないの！何かもう追い込まれてる感じがして最悪！！」

「それって現実が反映されてんじゃないの！？」

「もゝ最悪だヨ！英語の松嶋まじ死ねって感じ！あいつ書き取りばっかで授業進めるの早すぎるんだヨ吉田先生の所とかまだ一章のところやってるって言ってたヨ」

うさこはブツブツ苦手な教科の先生の悪口を言っていた。

今勉強している事がなんの役に立つんだろって思うことがある。

大人は勉強しないと立派な大人になれないって言うけれど私には良く分らない。

先生によってその教科に興味を持ったりするから結構先生との出会いというものは重要だ。

進学校の制服を着ているおかげで私はよく感心されるが実際は普通科でも授業についていくのがやっとで正直しんどい。

でもやっぱり誉められて悪い気はしない。

一流校と言うブランドを背負っているおかげで背筋を伸ばしている。

他に威張れるようなものを私は持ち合わせてなかった。

自信を持ってなんて言葉を何度も人から聞いたけど無いものをどうやって持てというんだろうか？

人に誇れるものなんて何も無い。

そんなものはどこかに置いてきてしまった。

27

夢と現実との境目に居る時、私はまだ衆太の事を覚えている。

しかし目覚めると直ぐに忘れてしまう。

衆太は慣れてくれば忘れないようになるみたいな事を言っていたけど私はあの時間が好きではないので忘れている方が自分の為だと思う。

時々どっちが現実なのかわからなくなる。

本当はこうして送っている日常が非現実なんじゃないだろうか？

私がここに居るのは誰かが見てる夢なんじゃないだろうか？

その誰かが目を覚ました時、私はどうなってしまうのだろうか？

衆太にこの話をする鼻で笑われてしまった。

「姉さんは見た目に反して夢見がちだね」

——可愛くない奴！

私がむつとすると衆太はガードレールの上にひょいっと飛び乗りバランスを取りながら歩き出した。

「俺たちがこうしてる間にもう一つの現実でも時間は過ぎてるんだよ。同じ時間にあるのに交わる事は無い。そう、まるでお互いの世界には境界線があるようにね」

「境界線……」

「そう、人でも何でもお互いに境界線を持つてる。それらは交わる事は無い」

「……」

「俺は姉さんになれないし、姉さんも俺にはなれない」

そう言うとき衆太は立ち止まり私を見下ろした。

「俺は他人の希望を使って厄を被う。何でだと思っ？」

「え？」

「わざわざ人の希望を貸してもらっより自分のを使った方が早いと思わない？」

「ああ・・・確かにそうだね・・・なんで？」

「・・・自分で自分は見えないからだよ」

「ん??」

私は首を傾げる。

「俺からは姉さんの形がはっきりと見えるけど、自分の姿を見ることは出来ない。鏡の中の自分しか知らない。それは実際の自分を見るのとは違うだろ？」

衆太は自分の形を探るかのように手のひらを見つめる。

「自分の事は自分が一番わかるなんて言うけど結局は他人の方が自分を知ってる事が多い」

「・・・」

「自分の世界の中で自分だけが見えない．．．だから人はこんなに孤独なんだ」

「衆太？」

「自分を探しているんだよ」

「え？」

「自分を探して埋まらない部分を他人で補う。でも本当に人が欲しいのは自分だ」

衆太の声はまるで凍えているようだった。

「私は衆太みたいにそこまで孤独を感じた事も無いし、自分が見えないなんて事はないけどな．．．」

「嘘だよ」

「何で？」

「姉さんは何も見えてない。何も気が付いてない」

「????」

「まあ．．．いいよ．．．今はそれでいい」

衆太は寂しいんだろうか。

思春期の男の子の気持ちなんて私にはさっぱりわからないけど、衆太の孤独感だけは伝わってきた。

「衆太が寂しいのはわかるよ」なんて言ったら他人を真に理解する事は不可能だ自己満足でしかないと言われるんだろうと思って何も言わなかった。

「僕はまだ子供だね」

『僕』と言って笑った衆太の笑顔はやはりいつものように寂しそうだった。

28

梅雨のジメジメした季節が到来し何をするにも憂鬱だ。

試験前だ進路相談だと色々あってここ最近は大バタバタしていたせいか酷く疲れた。

母には若いくせに何を言ってるのかと叱責され今朝は栄養ドリンク剤を飲まされた。

あの黄色い液体を細いストローで吸うとなぜだか懐かしい感じがし

た。

なぜだろう？

私は雨の降る校庭を授業中じっと見ていた。

雨は何か懐かしい記憶を呼び覚ます気がする。

私がまだ幼かった頃、まだ父の事が好きだった頃……。

ああ、思い出した。

栄養ドリンクが懐かしい理由。

熱を出した時にいつも父が飲ませてくれたんだった。

田舎で夜開いているお店も少ないのにわざわざ遠くまで原付に乗って私の為に栄養ドリンクを買って着てくれた。

子供だからと半分だけしか飲ませてくれなくて、大人になって全部飲めるようになるのが幼い頃のささやかな夢だった。

あの頃の父はとても優しくして私を原付の前に乗せてよく出かけた。

いつの頃からだろう？父が変わってしまったのは……。

変わったのは父だけだっただろうか？

父と母が離婚してくれた時、私は本当に心から喜んだ。

『助かった』

そう思っただの。

やっと解放される。

ヒステリックな母に怒鳴られる事も無くなる、兄が打たれて泣く姿を見なくても良くなる。

母の再婚によってさらに物事は良くなった。

でも私の心に出来た隙間は埋まる事は無かった。

海外赴任中の父が帰ってくれば『いい娘』でなくてはならない。

私に反抗期が無かったのは悟っていたからだ。

そんなことをしても無駄だという事。

私は親に生かされてるんだから。

自分の力で生きていけるようになった兄は家を出てから一度も帰って来ない。

ここはもう兄の居場所では無いらしい。

私はそんな兄が羨ましくもあり、そして少し憎んだ。

私を置いて行った兄。

たまに来るメールには短く近況が書かれているだけ、でも私は兄に一度も泣き言を言った事も無いし言うつもりも無い。

一緒に辛い思いをしてきた兄だから私は兄のことが良く分かる。

——それは心音がそう思ってるだけだよ

「え？」

誰かの声が聞こえたような気がして私は辺りを見渡すが皆しんと静まり返り、先生はひたすら黒板に文字を書き綴っていた。

教室に響くのはチョークの音とノートにペンを走らせる音。

そして雨の音だけだった。

呆然としていると前の席のうさこがチラッと後ろを振り返ってにやっと笑った。

私もうさこに釣られて笑う。

ふと教科書を見ると隅のほうに「しゅーた」と書かれていた。

私が書いたのだろうか？

書いた覚えは無い。

私はしゅーたと書かれた文字を消した。

雨の日は昔の思い出を運んでくる。

雨の日は嫌いだ。

特進クラスの男子が行き成り現れた

「あの・・・君、一の森小の人ですよね？」

彼は何の前ぶりもなく私の目の前に現れた。

ネクタイの色から特進クラスの生徒だということだけはわかるが、それ以外のことはわからない。

私は次の科学の授業の為に教室を移動している最中だった。

そこへ行き成り見ず知らずの特進クラスの生徒に声をかけられたのだ。

わけもわからず固まっていると隣のうさこから口に出さなくてもわかる位のワクワクオーラを感じる事が出来た。

今のうさこの脳内では『この男は何！？シオンとどういう関係！？』なんて考えが浮かんでいるに違いない。

「あの、何か？」

「ああ・・・俺は鈴木と言います」

すらつとした体系に、サラサラのストレートヘアーでバッチリとうちの制服と融合している鈴木君はどこからどう見ても美形の秀才で

まさに見本となるような人物に見えた。

試験前などはきつと彼の机には彼を頼って人が集まるに違いない。

そんな彼が私のつれない対応に少し困ったのか、照れくさそうな顔をしてポリポリと頬を人差し指で掻いた。

その仕草は小動物のようで可愛らしく、思わず私の母性に働きかけてきた。

「何これ・・・まさか告白!？」

うさこが私の服の裾を掴んで小声でそんなことを言うものだから私も妙な勘違いをしそうになったが、鈴木君の次の一言で全てはかき消されてしまう。

「美村の事なんだけど・・・」

私はハッとして全てを悟った。

うさこも空気を読んだのか「先に行ってるね」とだけ言って駆けて行ってしまった。

うさこの後姿を見送り私は視線を鈴木君に戻した。

「俺、中学の時彼女と同級生だったんだ……」

「……」

同じ悲しみを味わった者同士だからだろう、初対面のはずなのに私は彼に親近感を覚えた。

慌しくなる廊下の生徒達に次の授業の始まりが近い事を悟り私達は放課後近くのカフェで落ち合う事を約束した。

実験室に行くとうさが待っていましたとばかりに手を振ってきた。

でも私の顔色が良くないのを見ると「美村さんの事なんだね……」
と言って少し寂しそうに笑った。

私も「うん」とだけ言ってそれ以上は何も言えなかった。

30

放課後うさに訳を話して私は約束のカフェに向かった。

男の子と待ち合わせなんて少し緊張する。

しかし特別進学コースは放課後も7限目の授業があるとか聞いていたけれど鈴木君は大丈夫なのだろうか？

そんなことを考えながら私は店内に入りカウンターで飲み物を注文

し、店内を見渡してから空いている置くのソファアの席へ座った。

鈴木君はまだ来ていないようだった。

時計を見ながらストローで甘いコーヒーをすすする。

——遅い

やっぱり授業があつたに違いない。

私は待たされ若干イライラしていた。

もう1時間近く一人で待っているのだ。

こんなことなら電話番号なり聞いておくんだった、帰るに帰れない。

私がストレスと戦っていると息を切らせた鈴木君が髪の毛を振り乱して私の目の前に現れた。

「う、う、ごめん！！待った!？」

「・・・大丈夫ですか？」

待たされたイライラよりも息を切らせた鈴木君が今にも倒れそうだったので私はそっちの方が気になってしまった。

「本当にごめん、普通科と時間割違うつて知らなくて・・・それで・・・」

普通科ですみません。

「あの、何か奢るよ、奢らせてください！何がいい??」

「あ・・・ごめんなさい・・・さっきもう二杯目飲んだからお腹一杯で・・・」

「え・・・」

鈴木君は私の目の前に置かれた空の容器を見てガクつと項垂れた。

この人はどうして見かけに寄らずドジなんだろう。

鈴木君はため息をついてまだ落ち着かない呼吸を整える為に椅子に腰をかけた。

「お水持ってくるね」

「あ、いや・・・」

彼が言い切る前に私はセルフの水を汲み鈴木君に渡した。

「本当にすみません」

彼は私からカップを受け取ると頭を頂垂れてまたため息をつき、グ
イっと一気に水を飲んでしまった。

よっぽど急いで着たのだろう。

私はなんだか逆に申し訳ない気持ちになった。

彼が落ち着くのを待ってから私は話題を切り出した。

「あの、愛ちゃ・・・美村さんの同級生だったって・・・」

鈴木君は一瞬動きを止めると姿勢を正して私と向き合った。

やはりこうしてみると好青年だ。

典型的なしゃべらなければ良いタイプだ。

「はい・・・美村とは中学が一緒に生徒会も一緒だったんです。あの頃の彼女は大人しいけれど活発で学校行事なんかに積極的に参加するような子だったんです。ですから・・・」

彼は唇をかみ締めた。

次に彼が言う言葉は私にも理解できた。

彼が唇をかみ締める理由が私には分かる。

「私だって信じられません・・・未だに・・・」

私も鈴木君も俯き唇を噛んだ。

そっしなければ悔しくて涙が出てきそうだったからだ。

31

「私先日美村さんと偶然会ったんです」

「え？」

「少しの間しか言葉を交わせなかったけど・・・私が知ってる事
の美村さんとはやっぱり違って・・・とても辛そうな・・・」

「・・・彼女が変わったのは・・・受験に失敗したせいかもしれ
ない」

「え？」

「彼女・・・一学を受けたんですよ・・・」

「！」

愛ちゃんは第一志望だった一学に落ちていた。

自分が落ちた高校に私みたいな人間が普通科と言えども通ってるなんて知った時の愛ちゃんの気持ちは一体どんなだったんだろう・・・

私はなぜだか罪悪感で一杯になった。

常日頃から努力を惜しまず頑張ってきた人が落ちて、私は運良く受かった。

受験には運も必用だと言われていたけれどこれではあんまりだ。

愛ちゃんの直接の死因が私じゃないとしても私との再会は愛ちゃんにとって決して良いものではなかったはずだ。

「どうしても一学に入学したかったらしく浪人するつもりだったみたいですけど、親御さんがやっぱりそんな事許してくれなかったみたいで・・・あそこもレベル高いし俺はうちとそんなに変わらないと思ってたんだけど、やっぱり本人からすると違うみたいで・・・」

「・・・・・・」

「プライドも高かったし自分が許せなかった部分もあったんだと思うんです、それで理想と現実とのギャップに悩むようになっていったんじゃないかと・・・」

もうこれは推測でしかなかった。

でも今の私達には推測でも何でもいい、愛ちゃんが死んだ理由が欲しかった。

意味もわからず死んだなんてそんなはず無い。

「遺書は見つかったんですか？」

鈴木君は首を振った。

「・・・」

「せめて遺書があれば・・・」

この世に何の未練も残していく人たちに何の詫びも入れずに死んでいったというんだろうか？

私だったからどうするだろう。

死の衝動に駆られた時私はどうするんだろう？

「鈴木君」

「え？」

「お葬式参加してた？」

「・・・うん、そこで君を見かけたから」

「あ・・・私自己紹介もしてなかった」

「あ・・・そうだったね」

「宇野です」

「下の名前は？」

思わず顔が引きつる。

「・・・」

「え？」

「こゝ、心音」

「ここね？」

「うん・・・変でしょ」

「全然変じゃないよ、字は？」

「心の音って書くの」

「へえ～～～」

鈴木君は呆れているのか感心しているのか良く分からない声を出して頷いた。

「鈴木君は？なんて言うの？」

「え！？」

明らかにしまったという顔をした。

もしかして彼もまた犠牲者なのではと私は期待してしまった。

「・・・大之秦」

「だいのしん！？凄い渋い名前だね・・・」

「苗字が地味だろ？だからうちの祖父が・・・」

「いや、でもある意味新しいと思う」

「うん……でもやっぱり病院とかで名前を呼ばれると恥ずかしいんだ……お爺さんかと思っただって言われるし」

確かに。

「私達ある意味同士かもしれない」

「フツ面白いこと言うね、でも……色んな意味では同士だね」

鈴木君の顔がまた曇った。

私達は同級生を失った同士でもある。

死者からの伝言

32

——RRRRR・・・・・・

家の電話が鳴っている。

私は家の電話には滅多に出ない。

大抵留守電に切り替わるのを待つ。

——ピー

留守電に切り替わり聞きなれた声がスピーカーから聞こえてきた。

「もしもし宇佐美です、シオ・・・心音ちゃん携帯の電源は入ってないか圏外みたいなので・・・」

うさこからの電話だ、私は急いで受話器を取った。

「もしもし!？」

「あーシオン!もー携帯繋がらないんだもん」

「ごめんごめん、充電切れてるの忘れてた」

「あ、それでね今日先生が言ってた試験範囲聞き取れなかったところ教えてくれる??？」

「もしようがないなあ」

うさこに試験範囲を教えた後、暫くだべってから電話を切った。

明日学校に行けば会えるのにどうしてこうも話す事があるんだろう。

私は留守電のテープを巻き戻したつもりだったが再生ボタンを押してしまつたらしく数日前からの留守電を聞く羽目になってしまい、止め方もわからなかったので仕方がなくソファに座りお菓子を摘んだ。

電話からは音声が。月×日何件ですと流れている。

「一月一日、1件です」

次の瞬間私は凍りつく事になる。

「・・・美村です」

「!!!!!!!!!!」

立ち上がり電話を凝視する。

「心音ちゃん・・・陽だまりの影にログインして・・・パスは・・・」

間違いないか細い声で陽だまりの影と言う何だかわからない場所にログインしろという。淡々としたこの声は愛ちゃんのものだ。

慌ててその場にあつた紙に言われたとおりのパスワードを書きとめた。

愛ちゃんからのメッセージの謎

33

心臓がドキドキして破裂しそうだ。

足元がガクガクする。

――月――日と言えば愛ちゃんが亡くなった日だ。

私は恐怖でその場から動けず力なくその場に崩れ落ちた。

――怖い、怖い・・・早くお母さん帰ってきて！！！！

「大丈夫？姉さん」

肩をポンと叩かれ私はびくんと跳ね上がった。

振り返ると衆太が居た。

「衆太・・・」

「どうしたの？そんな怖い顔して」

「だ、だって・・・だって愛ちゃんから・・・愛ちゃんから電話が」

混乱して上手く話せないもう必死だった。

怖くてしょうがなくて私は衆太の腕を思いっきり掴んでいた。

「分かったから・・・」

衆太は私を落ち着かせようとソファーに座らせ自分も私の隣に座った。

衆太の手が私の髪を撫でてくれて人のぬくもりと香りに私は徐々に落ち着きを取り戻していた。

事情を話すと衆太はクスクスと笑い出した。

なぜ笑うのか私には分からなかった。

こんな場合で笑うだろうか？

「なんで怖がる必要があるの？友達でしょ？」

「だって・・・死んでるんだよ！？」

「この時はまだ生きてる」

「で、でも……しかも分けの分からない暗号を残して行って……怖いよ……」

「どうしてさ？わかんないなあ〜だって姉さんは愛の死の原因を知りたがってたじゃないか」

「そうだけど……」

「愛からの伝言なんだから……受け入れてあげなよ」

「でも……何の事だか……」

「多分直ぐ分かると思うよ」

「え？」

「とりあえずその影を倒そうか」

3
4

手に届かなかったものが行き成り目の前に突きつけられた時、人はこんなにも躊躇してしまうものなのだろうか？

知るのが怖い。

「心音」

「ん・・・」

母に肩を揺すられて私は目を覚ました。

「またこんなところで寝て！あんたはどこでも寝るんだから」

「ああ・・・ごめん・・・今何時？」

「もう9時半よ、ご飯食べたの？」

「んにゃ・・・」

「もう一人でご飯くらい作りなさいよ」

「はいはい」

まだ続く母の小言を聞き流しながらTVのリモコンのスイッチを入れる。

「ろくな番組やってないなあ・・・ご飯できたら教えて」

「まったくー！ー！ー！」

私は試験範囲を写したメモを持って部屋に戻った。

そして横の方に走り書きしてある文字に目が留まった。

「陽だまりの影　パス……」

ゾクとした。

そうだった私は愛ちゃんからの留守電を聞いたんだった。

——どうしよう……

私の頭では愛ちゃんが何を言いたいのかがさっぱり分からない。

ふと鈴木君の顔が思い浮かんだ。

彼なら何か分かるかもしれない。

私は頷き鈴木君に希望を託すことにした。

明日早速聞いてみよう。

私と鈴木君はどうも抜けているらしい。

お互いの電話番号を交換するのを忘れていた。

しかし特進の教室と普通科では校舎が離れていて普通科の生徒があちら側に行くのは気が引ける。

どうしたものだろうかと頭を捻っていると、あちらから来てくれた。

特進の生徒がこちらに来てはかなり目立つ。

しかも鈴木君は容姿端麗だ（黙っていれば）そんな彼が普通科のクラスにヒョイツと顔を覗かせている。

ざわつく教室にこちらが恥ずかしくなった。

鈴木君と目が合い、向こうで待っててと身振り手振りしてみたが全く伝わらず私を見つけた鈴木君は嬉しそうに手を振ってきた。

教室中の視線が私に集まる。

「くふふ・・・」愁傷様

うさこが面白くなってきたわと言いたげな顔をする。

私はため息をつき、教室を出た。

なるべく人目の付かない階段の踊り場まで鈴木君を引っ張っていき
あんな事したら困ると言うと言つと鈴木君は首を傾げた。

鈍感すぎる。

「まあいいわ・・・実は・・・」

私は昨日の事を鈴木君に話した。

彼の顔が強張るのが分かった。

鈴木君は信じられないといった感じで口を手で覆った。

「それで、その暗号って言つのは？」

「はい」

ポケットからメモを渡すと鈴木君は目を大きく見開いた。

「信じられない・・・」

「でしょ・・・」

「普通科ってまだこんなところをやってるの!？」

「え!？」

それは試験範囲をメモしたものだった。

「ちょ、違うそれじゃなくてここ!この隅に書いてあるの」

しかしそれでも試験範囲が広いと思っていたのに特進ではもうとつ
くにこの範囲は終わっているらしい。

「これって・・・」

鈴木君は考え込むように顎に手を当てた。

36

「何か分かる？」

「うん・・・多分これサイトのパスワードじゃないかな？」

「サイトって・・・インターネット？」

私は携帯を触るくらいでパソコンとか言うものにはとても疎かった。授業で何度か使ったくらいでネカフェと言うものにもあまり行ったことが無い。

あの独特の雰囲気はどうも好きになれなかった。

しーんとしていてそして皆自分だけの世界だけに没頭するあの空間は私から見るととても異質で馴染めるものではなかった。

「うん、陽だまりの影って言うのはサイト名っぽいし・・・放課後調べてみよう」

「・・・また私を待たせる気？」

「いや・・・今日は7限無いから大丈夫」

そんなわけで私達は放課後コンピュータールームに集まった。

二つあるコンピュータールームのうち一つは部活で使われているがもう一方は一般の生徒達に開放されているのだ。

あまり使われていないのか試験前だからか人はまばらで私達は空いた席に着いた。

私とは違い鈴木君はとても慣れた手つきで素早くキーを弾いた。

「陽だまりの影」と検索しただけでもざっと10万件近い件数がヒットした。

「ま、まさかこれから全部探す気!？」

「……何か美村に関連する言葉無いかな？」

「うん……」

閉館するまで私達はキーワードを打ち続けたがこれといったものは出会えなかった。

「また明日探してみよう……家でも探してみるよ」

「うん、私も携帯で見してみる」

そう言っただけでこの日は分かれた。

でも一人ではとても探せる気にはならなかった。

謎は解けた

深夜ふと目が覚めて枕元の携帯の時間を見た。

「3時か・・・」

一度携帯を置き、枕に顔を埋める。

「・・・・・・・・」

何の気もなしにウェブに繋いだ。

そして陽だまりの影と入力する。

「・・・・・・・・」

さらに単語を続けた。

「死にたい」

ヒット件数は1件。

クリックする。

するとパスワード画面に切り替わった。

私は目を見開き怖くなって携帯の電源を落した。

今の私には羞恥心など取るに足らない問題だった。

早くこのことを鈴木君に伝えなければと思い、特進コースの校舎に乗り込んだのだ。

クラスは3クラスこのうちのどこかに鈴木君は居るはずだ。

こうなるともう道場破りの気分だ。

頼もつゝと心から叫んでしまいたい。

とりあえず一番近いクラスのドアを開ける。

いつせいに視線が私に集まる。

道場破り？何それ？

先ほどまでの威勢はどこ吹く風、私は近くに居た人に鈴木君居ます

か？と聞くのが精一杯でその生徒はかわいそうなものを見るような目で私を見て「鈴木は2人居るけど？」と冷たく言い放った。

もう穴があつたら入りたい。

「だ、大之秦君……」

「ああ、その人は一組」

ありがとう鈴木君！変わった名前で助かった。

一組に行き鈴木君を見つけ私は大きく手を振った。

鈴木君が何か口をパクパクさせて何か言っているが分からないので首を傾げると彼は立ち上がった。こちらに来た。

38

「ちょっと宇野さん……こっちこっち」

「え？」

デジャブ？

私は階段の踊り場に連れてこられた。

「困るよ、宇野さん目立つんだから・・・」

「な、鈴木君だって同じことしたでしょ!？」

「いや、俺は良いんだよ・・・」

「なんでよ、私だって恥ずかしかったんだから!!!」

「いや、俺と宇野さんじゃ違うんだって・・・」

私はピンと来た。

思わずにやけてしまう。

「なるほど・・・」

「え？」

「彼女でしょ!？」

「あらぬ噂がたつと困るからでしょ?」

「彼女は居ないけど・・・」

「そうなの?モテそう」

「いや・・・俺ってちょっと抜けてるらしくて・・・」

抜けてるのは認めるがそれ以上に彼は鈍い、女子の視線に気が付いていないだけだろう。

「だったら私と一緒に居るのはお互い様でしょ？」

「・・・俺は地味だから騒がれたりしないよ、でも宇野さんは美人だから・・・絶対後でからかわれる・・・」

「えっ・・・」

この人本当に自分の魅力に気が付いて無いんだ。

まあそこがいいのかもしれないけど。

微妙な空気が流れる。

「え、えつと今はこんな話してる場合じゃないの・・・」

「あ、そうだね」

「昨日携帯いじってたら出てきたの」

「え？」

「ちょっと見て」

携帯を一緒に見る形になり、鈴木君と肩が触れ合った。

彼はあまり気にしていないようだったけど私はちょっとドキッとした。

男子とこんなに近くで話した事なんて今までなかった。

39

「もしかしてこれが美村の？」

鈴木君の声に我に返り「多分」と頷きパスワードを入力しようとしたが、手が震えてできなかった。

鈴木君は私の肩に手を置くと改めてまた放課後パソコンで見ようと言ってくれた。

私も少し安心して頷いたがその日彼は一時間遅れてきた。

「本当にすみませんでした・・・」

謝る彼に怒る気にもならず気分を切り替え私はキーボードをゆっく

りと打った。

鈴木君のように早くは打てない。

「陽だまりの影……」

死にたい……」

「死にたい……」

鈴木君は眉間に皺を寄せた。

そしてパスワード画面が大きく開かれた。

私はまた躊躇してキーが押せなかった。

見かねた鈴木君が横から代わって打ってくれた。

次に画面に現れたのはブログサイトだった。

「陽だまりの影……」

「美村のブログの名前だったのか……」

「愛ちゃんの日記……」

陽だまりの影は中学2年生の頃から始まっていて、最初の頃のブログ名は陽だまりの光だった。

内容はその日の学校での出来事や、悩みなどが綴られていたけれどどれも愛ちゃんらしくて真面目な文章だった。

陽だまりの影

37

深夜ふと目が覚めて枕元の携帯の時間を見た。

「3時か・・・」

一度携帯を置き、枕に顔を埋める。

「・・・」

何の気もなしにウェブに繋いだ。

そして陽だまりの影と入力する。

「・・・」

さらに単語を続けた。

「死にたい」

ヒット件数は1件。

クリックする。

するとパスワード画面に切り替わった。

私は目を見開き怖くなって携帯の電源を落した。

今の私には羞恥心など取るに足らない問題だった。

早くこのことを鈴木君に伝えなければと思い、特進コースの校舎に乗り込んだのだ。

クラスは3クラスこのうちのどこかに鈴木君は居るはずだ。

こうなるともう道場破りの気分だ。

頼も~~~~と心から叫んでしまいたい。

とりあえず一番近いクラスのドアを開ける。

いつせいに視線が私に集まる。

道場破り？何それ？

先ほどまでの威勢はどこ吹く風、私は近くに居た人に鈴木君居ますか？と聞くのが精一杯でその生徒はかわいそうなものを見るような目で私を見て「鈴木は2人居るけど？」と冷たく言い放った。

もう穴があつたら入りたい。

「だ、大之秦君・・・」

「ああ、その人は一組」

ありがとう鈴木君！変わった名前で助かった。

一組に行き鈴木君を見つけ私は大きく手を振った。

鈴木君が何か口をパクパクさせて何か言っているが分からないので首を傾げると彼は立ち上がってこちらに来た。

38

「ちょっと宇野さん・・・こっちこっち」

「え？」

デジャブ？

私は階段の踊り場に連れてこられた。

「困るよ、宇野さん目立つんだから・・・」

「な、鈴木君だって同じことしたでしょ!？」

「いや、俺は良いんだよ・・・」

「なんでよ、私だって恥ずかしかったんだから!!!」

「いや、俺と宇野さんじゃ違うんだって・・・」

私はピンと来た。

思わずにやけてしまう。

「なるほど・・・」

「え？」

「彼女でしょ!？」

「あらぬ噂がたつと困るからでしょ？」

「彼女は居ないけど・・・」

「そうなの？モテそう」

「いや・・・俺ってちょっと抜けてるらしくて・・・」

抜けてるのは認めるがそれ以上に彼は鈍い、女子の視線に気が付いていないだけだろう。

「だったら私と一緒に困るのはお互い様でしょ？」

「・・・俺は地味だから騒がれたりしないよ、でも宇野さんは美人だから・・・絶対後でからかわれる・・・」

「えっ・・・」

この人本当に自分の魅力に気が付いて無いんだ。

まあそこがいいのかもしれないけど。

微妙な空気が流れる。

「え、えつと今はこんな話してる場合じゃないの・・・」

「あ、そうだね」

「昨日携帯いじってたら出てきたの」

「え？」

「ちょっと見て」

携帯を一緒に見る形になり、鈴木君と肩が触れ合った。

彼はあまり気にしていないようだったけど私はちょっとドキッとした。

男子とこんなに近くで話した事なんて今までなかった。

39

「もしかしてこれが美村の？」

鈴木君の声に我に返り「多分」と頷きパスワードを入力しようとしたが、手が震えてできなかった。

鈴木君は私の肩に手を置くと改めてまた放課後パソコンで見ようと言ってくれた。

私も少し安心して頷いたがその日彼は一時間遅れてきた。

「本当にすみませんでした……」

謝る彼に怒る気にもならず気分を切り替え私はキーボードをゆつくりと打った。

鈴木君のように早くは打てない。

「陽だまりの影……」

死にたい……」

「死にたい……」

鈴木君は眉間に皺を寄せた。

そしてパスワード画面が大きく開かれた。

私はまた躊躇してキーが押せなかった。

見かねた鈴木君が横から代わって打ってくれた。

次に画面に現れたのはブログサイトだった。

「陽だまりの影って……」

「美村のブログの名前だったのか……」

「愛ちゃんの記事……」

陽だまりの影は中学2年生の頃から始まっていて、最初の頃のブログ名は陽だまりの光だった。

内容はその日の学校での出来事や、悩みなどが綴られていたけれどどれも愛ちゃんらしくて真面目な文章だった。

「

40

●月●日

今日委員会で遅くなってしまい外が真っ暗で怖かったけどS君が途中でまで送ってくれて嬉しかった。

S君はかっこいいのにちょっとおっちょこちょいだから目が放せない。

ちょっと弟みたいな感じ（笑）

明日は早く帰れると良いな！さて今から宿題しますw

最初の頃は一般公開されていたようで読者のコメントなども載っているのぼのしている。

読んでいて顔が綻んでくるような内容だった。

●月●日

塾のクラスがAからBに下がった。

お母さんにはもう塾から連絡があったみたい・・・

今から家族会議（泣）

もう勉強ばかりヤダな、文武両道って私には無理なのかな？

でも皆は私の事頭が良くて何でもできる子って思ってるみたい・・・

私もそれが嬉しくて無理してるところがあるからな・・・

見栄っ張りなのです

●月●日

もう辛い、でも泣き言はここでしか言いません！

皆さん応援してくれるしねw

●月●日

委員会のS君が今日もまたドジをやらかして一緒に残って仕事を片付けた。

「すみません」と何回も言っておかしかったww

日記によく登場するS君は鈴木君の事だろう、彼は昔からドジだったらしい。

愛ちゃんはこの手のタイプがどうも放っておけないらしい。

日記はさらに続き、三年生にもなると受験に対する内容が増えてきた。

●月●日

内申書の為に生徒会に入することを勧めたのはお母さん……

私は何としても一学に行かないといけない！

一流の高校に入って一流の大学に行くんだ！！！！

でも一学に行きたいのはそれだけじゃないんだ……

今はまだ内緒！追々話しますねw

●月●日

KがS君に告白したらしい。

その一行を見て私は鈴木君を見てニヤついた。

すると彼はちよつと照れて頬を掻いた。

やはりこのS君とは鈴木君のことらしい。

●月●日

S君はKの事は好きじゃなかったらしい、突然告白されたから困ったようだ。

彼は鈍いから多分今までKがアピールしてたのに気が付いてなかったんだと思う。

KのほかにもYやMも……

私は堪えきれず噴出してしまった。

すると鈴木君は手で顔を覆った。

4
1

「やっぱりモテるんだね鈴木君」

「いや、違うよ……だって全然そんな素振りなかったし……」

「はーやっぱりもてる男は違うなあ」

「もー良いから次！」

●月●日

風邪を引いてしまった。

こんな時期に風邪を引くなんて最悪。

薬は飲めないし……。なんか塾の先生が言うには受験の日に風邪引いたときに薬が効かないと困るからだって……。しゅっちゅう飲むものじゃないけどそんなこと言われると怖いよ……。

●月●日

インフルエンザが流行って学級閉鎖になった。

あの人に会えないのは少し寂しい・・・

あの人って言うのは今はまだ秘密だけど実はその人も一学目指してるの！

だから私も絶対同じ学校に行きたい！！

日記を読んでいくにつれ愛ちゃんの物事の考え方だとか、中学生が見栄を張って書いている部分などが見受けられた。

文章と言うものは不思議だ、その人の人柄までも伝わってくるような気がする。

そして私は最初からあることに気が付いていた。

日記の登場人物は身近な人が殆どだがその中でもS君、すなわち鈴木君の登場回数は日を追おう毎に増えている。

恐らく一学を目指している愛ちゃんの想い人は鈴木君の事だろう。

うさこが好きだった人を追って一学を目指したように愛ちゃんも純粹な動機で一学を目指していたんだ。

うさこも決して頭の良い方じゃなかったらしいけれど、恋の力というものは時として物凄い威力を発揮するらしい。

日記を読みふけているうちに随分時間が経ってしまったらしい、下校を促すアナウンスが流れ始める。

「・・・今日はここまでにしようか」

「うん、何か目が痛くなっちゃった」

「随分読んだからね・・・美村さんがこんな日記をつけてたなんてね・・・少し意外だったな・・・こんな文章書くんだなって・・・もっと真面目な感じがしてたから」

「そうかな？小学生の頃の愛ちゃんは優等生だったけど凄く可愛らしいこだったよ、私はこれ見てああ、愛ちゃんだなって思った」

「・・・そうか、仲よかったんだ」

「う、うん・・・でも卒業してからは全然連絡も取らなくなって・・・私立の中学なんてなんか別世界だもん・・・」

パソコンの電源を落とし帰り支度をしながら私達は話した。

会話を途切らせるのがなぜか怖かった。

沈黙が来れば私は確実に昔の思い出に吞まれて落ちてしまう。

鈴木君は多分何も気が付いていなかったんだろうけど懸命に話す私の会話に合わせてくれていた。

何故愛ちゃんは私にブログを残したのだろうか？

答えは見つからない。

たまたま偶然に会ったから私を選んだのだろうか？

誰でも良かったのだろうか？

私だったら自分の遺品のようなものであるブログを誰に託すだろう？

長年かけて築いたものを易々と人に渡すなんてマネはできない気がする。

多分何の証拠も残らないように削除する。

愛ちゃんは私に何を伝えたかったの？

ベッドの中で私は何度も寝返りを打ち、やがて夢の中へと落ちて行った。

愛ちゃんのブログを見つけてからは放課後鈴木君と過ごす時間が増えた。

まあ彼の7限がある日は大抵私が待たされるのだがそれももう慣れてしまっていた。

待っている間に私は愛ちゃんの日記を読むようなマネはしなかった。

二人で見たほうがよい気がしていたからだ。

私一人で受け入れるには重過ぎる。

その日鈴木君と落ち合ってから私はこのブログの存在を愛ちゃんの親に話すべきかどうか相談した。

彼も困った顔をして首を捻った。

「もしかしたら親には見せたくないものかもしれないよ？わざわざパスまでかけてるんだし・・・」

「そうかなあ・・・でもやっぱりおばさんたちは嬉しいと思うんだけど・・・」

「とりあえず俺たちでこれを読んでからどうするか決めよう・・・これは美村から君に託されたものなんだから・・・」

「うん・・・」

ふと視線を感じて顔を上げると隅の方に同じクラスの女子が座っていた。

私と目が合うと口元にわずかに微笑を浮かべそして前に向きなおした。

「知り合い？」

鈴木君に言われ私は頷いた。

「同じクラスの子・・・あんまりしゃべった事無いけど・・・」

センターパーツで耳元まで伸びた髪の毛が時折唇に触れるのを見るたびに、同性ながら私はこの人にドキツとする事が時折あった。

クラスでもかなり特異な人、それが青山さん。

同じ年とは思えないほどの色気と大人びた物腰。

普通科と言えども優等生の多い中、彼女はとても目立っていた。

皆きっちり制服を着こなしているのに対し青山さんはブラウスのボタンを第二ボタンまで外し、ゆるくネクタイを締めて制服をルー

ズに着こなしている。

別に悪ぶってるわけでもない。

その服装は浮いていたが彼女には似合っていた。

私も大人っぽいなんて言われてるけれど彼女の大人っぽさはまた違うのだ。

私は外見だけ大人で中身は伴っていない。

でも青山さんは外見と中身が一致しているように見える。

だからあの色気が自然と出てくるんだろうと思う。

私は同性として青山さんに憧れのようなものを抱いていた。

しかし彼女はこんな所で何をしているのだろうか？

特に誰とつるむ訳でもなくいつも一人で居る青山さん。

パソコンが彼女にはとても不釣り合いに見える。

——— なんか調べものかな？

「声かける？」

鈴木君の問いに私は首を振った。

「あんまりしゃべった事無いって言ったじゃん！」

「そう・・・なんか冷たそうな人だね・・・」

「え？そう？」

意外だった。

鈴木君なら「凄い美人だね」なんて言って鼻息を荒くするかと思っていたのに。

クラスの男子も青山さんのことを遠くからしか見ていない。

恐らく高嶺の花過ぎるのだろう。

17かそこらの男では青山さんには吊り合わないだろう。

もっと年上の・・・

「宇野さん」

「え？」

「ぼーっとしてるけど大丈夫？ここ最近パソコンで目が疲れてるんじゃない？あんまりパソコンいじったりしないんでしょ？」

「ああ、違うの平気！！パソコンも慣れると面白いし」

「だったらいいけど・・・あんまり無理しないで」

「大丈夫だって！！」

そう言ってもう指が覚えた愛ちゃんのブログへログインする。

私は少しだけ慣れた手つきでキーボードを叩いて愛ちゃんのブログへログインした。

今日は3年の夏辺りからだ。

●月●日

いよいよ夏期講習が始まった。

でもはつきり言って学校に来る時間が勿体無い。

こんなことなら塾で勉強した方がマシな気がする。

今度塾のクラス替えのテストがあるので今度こそAクラスに振り返

きたい！
絶対負けない！！！！

●月●日

私たち3年が勉強している中下級生達は部活に勤しんでる。
校庭から野球部の掛け声が聞こえてきてイライラした。
集中しなきゃ……………

この辺りからはあまりコメントする人も無くなっていた。

内容も以前のように可愛らしいことは何もかれず淡々とした文章
が綴られているのみだった。

あまり読者を意識しなくなったような気がする。

自分の事で精一杯だったんだろう。

でも日記は辞めなかった、愛ちゃんにとってはもう生活の一部とな
っていたに違いない。

4
4

今日は日直なので早めに家を出た。

人通りも無くなんだか心細いが通学路が近くなると私のように日直

なにかまばらに生徒が歩いているのが見えてきて、私は少しほつと
する。

靴箱から上靴を取り出していると「おはよう」と声をかけられた。

振り返ると青山さんが居た。

思わずドキッとして、キョドってしまった。

動揺している私を見て青山さんはフツと笑々と自分の靴箱を開けた。
日直でもないのに彼女はこんな時間に学校に何しに来ているのだろ
う？

上靴を履いて先に行ってしまう青山さんを少し追いかけるようにし
て歩いた。

「あの、青山さん」

「何？」

「いつも早いの？」

「ええ」

「そうなんだ」

あまり会話が続かない。

ひょっとして嫌われているんだろうか？

いいや、嫌っていたらおはようなんて声かけてくれるわけ無い。

言葉を選んでいると青山さんがこちらを振り返った。

「君、鈴木君と付き合ってるんだって？」

「はえ！？」

行き成り話題を振られたので変な声が出てしまい、私は慌てて言い直す。

「なっ・・・違います！！ただのお友達です」

「そんなに断言しなくても良いんだけど」

「いや、そう言うのははつきりさせとか無いと！」

「そうなの・・・そうなんだ」

青山さんからそんなことを聞かれるなんて意外だった。

そう言えば青山さんはパソコン室に居たっけ。

「青山さんはよくPCルームに来るの？」

「・・・時々ね」

「そうなんだ・・・」

青山さんがピタッと歩みを止めた。

「私教室のカギ取ってくるから先に行っていて」

「え！？いいよ私日直だし」

「いいの、私の日課みたいなもんだから」

「ええ？？？でも日誌とかあるし」

「先生の机の上にあるからついでに持ってくるわ」

「でも・・・」

「いいから、じゃあね」

「あ・・・」

有無を言わず青山さんは行ってしまった。

実は真面目なのかな？

教室の前で青山さんが来るのを待っていると彼女は私に力ギを見せながら歩いてきた。

思わず微笑みを返す。

教室の力ギを開けると青山さんはなれた手つきで教室中の窓を開けた。

自分の席につくと大きく息を吐いて落ち着いたようだ。

私も自分の席に荷物を置きチラッと青山さんの方を盗み見た。

バチッと目が合ったかと思うと青山さんは「はい」と言ってこちらに向かって何か投げてきた。

「ええ！？」

私は取りこぼさないようにそれをキャッチした。

「ナイスキャッチ」

青山さんはそう言うって紙パックのグレープフルーツジュースにストローを突き刺した。

私に投げたのは苺牛乳だった。

「いつも飲んでるでしょ？君の相方が」

「え、うん……」

「それは君に差し入れ」

「え？でも……」

「いつも飲みたそうにしてるじゃない」

ドキツとした。

苺牛乳なんて可愛らしい飲み物私のキャラじゃないといつも恥ずかしくて飲めないで居たのは事実だ。

それを青山さんが察していたなんてビックリした。

クラスメイトに興味なんて全然なさそうに見えたから。

「心音って可愛い名前よね」

「え・・・」

「前からそう思ってた」

「あ、ありがとう・・・」

今までろくに話した事も無かったのにこんな風に話せるなんて、なんだか夢のようだ。

緊張のせいか苺牛乳の味が私には良く分からなかったが心臓の鼓動だけは妙に早く感じた。

45

「おはよー」

時間が経つにつれ、生徒達が教室に入ってくると段々と活気付いてきた。

さっきまで近付いていた青山さんとの距離がまた開いてしまったような気がした。

チラッと青山さんを見ると青山さんはいつもの大人びた顔をして足を組み頬杖を付きながらジッとクラスメイトが教室に入ってくるのを見ていた。

「シオンおはヨ!」

うさこが朝から元気な笑顔をこちらに向けて来た。

一瞬青山さんの視線を感じたが、私は振り返らずにうさこに微笑み返した。

「鈴木君とはどうなってるの?」

エクレアにかぶりつきながらうさこは苺牛乳を片手に持っていた。

「朝からそんなもん食べて大丈夫なの?」

「大丈夫だヨ!糖は頭に良いんだから!受験の時は甘いものばかり食べてたヨ・・・っじゃなくて鈴木君は?」

「は?」

「付き合ってたんでしょー」

「いや・・・全然」

「はあ?なんで?」

「なんでって・・・彼とはそう言うのじゃないの・・・」

「もう別にいいじゃん付き合っちゃえば！付き合ってれば好きになるって」

「てかなんでそう言う方向に持って行きたいわけ？」

「だって色恋話が無いなんて女子高生失格じゃない？勿体無いでしょ！今恋しないでいつするの！！！」

「だったらうさこだって付き合えば良いじゃない、何だっけ？体育コースの人」

「ダメなのヨ！私は一人に絞れないから！！！」

結局うさこはキヤーキヤー騒いでいるのが楽しいのであって実際はまだ付き合ったりしたいとは思っても踏み出す勇気が無いんだと思う。

「鈴木君とシオンだったらお似合いなのにな」

「確にかっこいいけど付き合うかとなると違うと思うな」

「ふーん私だったら鈴木君とか近くに居たら直ぐ好きになっちゃうと思うヨ」

「あんたは顔が良ければいいんだよ」

「アハハ、それもあるけどあの人性格も良さそうじゃない？」

「うん・・・性格は良いよ・・・抜けてるけど・・・」

「ドジッ子かあゝ萌えるなあ」

私は何となく鈴木君とうさこが付き合ってるのを想像して噴出してしまった。

「ちょ、何！？何人の顔見て笑ってんの！？」

「い、いや・・・ちが・・・プププ・・・」

「も～～何ヨーーー！」

二人が付き合ったら絶対うさこがドジな鈴木君を引っ張っていく形になるんだろうな。

そしてうさこにぺこぺこ頭を下げる鈴木君が頭に浮かんだ。

そんな鈴木君にうさこは今みたいにプリプリ怒るに違いない。

結構二人はお似合いかもしれない。

「うさこ可愛いよ」

「え!?!」

うさこは私の言葉に固まってしまった。

「可愛いようさこく絶対直ぐ彼氏出来るって」

「ちょ、やめてよ……」

うさこは眉間に皺を寄せた。

普段言わないような事を私が言ったので気持ち悪がっているのだ。

それがまた面白い。

「ねえうさこ」

「何?」

「うんん・・なんでもない」

「何ヨ変なの」

——ずっと友達で居てね

46

●月●日

塾の試験の判定はBだった。

もうちよつと頑張れば何とか一学に行けそう!!

毎日朝方まで勉強した甲斐がありましたw

絶対あの人と同じ学校に行くんだ!

今はまだ告白とか無理だけど少しでも近くに居たい。

愛ちゃんの気持ちは私にはよく分からない。

好きな人と同じ高校に行くのは何の為?

もしそこでその人に彼女ができたりしたら辛いだけなのに、それでも近くに居て見ていられれば良いんだろうか?

うさこなら愛ちゃんの気持치가わかるだろうか?

●月●日

今日Uに相談された。

S君のことが好きになったからどうしようって……

私に聞いてどうするつもりなんだろう、いつものように相談に乗ってあげた。

本当は早く帰って勉強したかったのに・・・無駄な時間を過ごした。

●月●日

中間試験が終わった。

生徒会室に行ったらS君が一人で居て二人つきりで色々話せて楽しかった。

最近お父さんが忙しいらしくなかなか家に帰って来ないらしいからお母さんの機嫌が悪くて大変だと言っていた。

S君のお父さんは一流大学の教授だって言ってたつけ、S君もお父さんに似て頭がいいんだねw

「ねえ鈴木君」

「ん？」

「愛ちゃんが好きな人って・・・さずがにもう気が付いてるよね？」

私が聞くと鈴木君は少し間を置いてから「うん」と答えた。

茶化す気にはなれず私は「そう・・・」とだけ言ってまたブログを読み進めていった。

いよいよ試験が終わり結果発表の日の日記は最後まで読めなかった。

こんなのは愛ちゃんが書く日記じゃない。

コメント欄は荒れて暫くブログは放置されていた。

文章は人柄を表す。

この文章を何かに例えたとするなら……

そうだ私はこれが何か知ってる……

夢で見たあの怪物のようにドロドロしていてとても醜い。

ブログの名前が陽だまりの影に変わったのは高校生になってからだ。
った。

コメント欄も外され恐らく公開をやめてプライベートなものに切り
替えたようだった。

文章はとても暗い。

恨み辛みが長い文章で書き連ねてある。

とても愛ちゃんが書いたものだとは思えなかった。

私知ってる愛ちゃんは……

私は耐え切れず頭を抱えた。

「宇野さん大丈夫？」

「……もう嫌……こんなの……」

弱音を吐く私を鈴木君は励ますわけでもなく黙って見ていた。

「もう……止めようか？」

「え？」

「辛いなら無理する事無い……」

そんな風に言われると素直に頷く事は出来ない。

「うん……愛ちゃんは私に知って欲しかったんだと思うから……」

「でも頑張りすぎなんじゃないかな？」

「……鈴木君こそ付き合ってくれて……」

「良いんだ……一人で居ると考え込んでしまうから……」

「うん……」

「今日はこの辺で終わりにしよう・・・時間はまだあるんだしそろそろ試験も近くなるし勉強しないといけないでしょ?」

「ああ・・・うん・・・」

試験の事など頭になかった。

少し焦ってしまう。

「今日は早めに切上げよう」

「そうだね」

鈴木君と別れてから家に向かう途中のファーストフード店でうさこがクラスメイト達と居るのが見えた。

うさこは誰とでも馴染めて誰からも好かれるタイプだ。

正直私なんかと一緒に居るのが不思議な気がする。

私と居るよりもクラスのグループに混じっている方がうさこにはあっているような気がする。

クラスメイト達と楽しそうにしているうさこがとても遠く感じられた。

私達の世界は交わる事はない

私はまた不思議な空間に居る。

辺りの人がぼやけて見えない。

息苦しい。

目の前に現れた少年を私は知っている。

「衆太・・・」

その名を呼ぶと少し安心する。

衆太は微笑んで姿を変える。

大人になった衆太は馴れた手つきで私の腰を引き寄せると私の中にある希望に手を触れる。

「うつつ・・・」

私はこの行為に慣れることはなかった。

妙な声が出てしまう。

私に変な声を出すと衆太は少し頬を染め眉を潜めた。

スルッと自分の中から出た希望と言う名の剣はいつ見ても美しいと思える。

こんなものが自分の中にあるなんて少し変な気分だ。

しかし衆太に言わせると誰の中にもこれはあるらしい。

私は他人のものを見たことがないので比較する術はない。

ドロドロとしてはつきりとした形を持たない怪物に衆太は剣を構える。

もし彼が怪物にやられたらどうなるんだろう？

ふとそんな考えが過ぎったが衆太が負けるわけが無いことを私はなぜか確信している。

怪物は酷く弱い。

そして醜いのだ。

衆太はそれは人間から出たものだという。

人間の憎しみやマイナスのイメージが生み出すものだ。

この空間で時が流れている間も現実世界でも時間差はあるものと同じように時間が流れている。

現実世界での私は今一体どうしてるんだろつと不安が過ぎる事もある。

母に見られた時は声をかけても上の空で夢遊病のようだったと言う。家の中ならまだいいけれど外で不審な行動を取っていた場合を考えると少し怖いものがあるので外でこの空間に遭遇した場合は極力その場から動かずおとなしくしている。

人間から出たマイナスのもの・・・以前愛ちゃんの形をしたあれは私が作り出したイメージだったのだろうか？

「ふう・・・」

怪物を倒した衆太は息をつくと私に剣を投げてよこした。

すると剣は私の手の中から消えてなくなってしまった。

「・・・前はキスして戻してなかったっけ？」

「そうだったか？」

「あの行為には意味があると思ってたけど・・・そうじゃない見た
いね」

「・・・どうでもいいだろ」

衆太は少し照れてぶっきら棒に言うのでなんだかおかしかった。

「あ、あんた・・・大人の姿になると途端にガキっぽくなるわね」

「う、うるさい！どうでもいいだろ」

「何よいつもかつこつけてるくせに、中身はガキよね」

「フン」

「やっぱりあんたの本当の姿って子供の方なの？」

「関係ない！！」

「でも子供の衆太の方が余裕あるしなあ・・・わっかんないなあ」

「もういいだろ！じゃあな！」

「あ、待って！もう一つだけ」

「ああ？」

衆太は機嫌悪そうに眉をひそめたが立ち止まってくれたので聞く気はあるようだ。

「衆太ってどこに住んでるの？」

私の質問に衆太は急に真顔になる。

「……覚えてない」

「え？」

「ここ来ると向こうのことはあまり覚えてないんだ……」

「え……それって」

私とは逆だ。

私は向こうの世界に戻るとこちらの世界の事を臆だけしか覚えていない。

はつきりとしたことを覚えていない。

「お互いにこれ以上は覚えていられないみたいだ……」

「どうしてだろう……」

「多分踏み入れちゃいけない世界なんだ」

「え？」

「現実世界とこちらの世界は同じように存在はしているが境界線があつて決して交わる事はない。交わってはいけないからだ」

「交わったらどうなる？」

「交わる事は決してない」

「どうしてそう言えるの？」

「簡単だ、夢の世界と現実の世界が交わることはないだろう？」

「うん・・・」

交わらないと聞いて安心すべきなのに私は少し寂しくなった。

なぜだか分からなかったけど衆太と私は現実の世界で出会ってもお互いを覚えて居ないのだから決して声を交わすことも無いのだ。

「この世界だけだな」

「ん・・・」

「俺たちが一緒に居られるのは」

「何かおかしいね」

「おかしいな、あんな怪物しか居ないマイナスの世界なのに……」

「本当……変なの……」

「あまり長く居るとまずい、戻るぞ」

「あ……」

気がつくと私は歩道橋の上に居た。

衆太を探して辺りを見渡すがそれらしい人物は見当たらなかった。

そして直ぐに私は衆太の事をいつものように忘れてしまう。

さっきまで確かに誰かと話していたのに思い出せないもどかしさで一杯になるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7601g/>

ボーダー

2010年12月29日14時21分発行